# 散歩する侵略者

作　前川知大

■登場人物

加瀬鳴海（カセナルミ）……真治の妻
加瀬真治（カセシンジ）……鳴海の夫
桜井正蔵（サクライショウゾウ）……ジャーナリスト、元警察官
船越明日美（フナコシアスミ）……鳴海の姉
船越浩紀（フナコシヒロキ）……明日美の夫、警察官、桜井の元同僚
天野真（アマノマコト）……高校生
立花あきら（タチバナアキラ）……専門学校生
丸尾清一（マルオセイイチ）……無職
長谷部航（ハセベワタル）……丸尾の後輩
車田寛治（クルマダカンジ）……医師

■あらすじ

日本海に面した小さな港町金輪町。加瀬真治は三日間の行方不明の後、別人格となって発見された。医師の診断は脳の障害。それまでの結婚生活が上手くいってなかった鳴海は、生まれ変わったような真治の世話に密かな充実感を得る。

同じ時期、田舎町に似合わない凄惨な事件が起きる。老婆が家族を惨殺し自殺するという事件で、一人生き残った孫娘も神経衰弱状態だという。その後、町に奇病が流行り出す。ある特定の概念を失い、それについて理解できなくなるというもので、それは真治の症状とも似ていた。医師の車田は頭を悩ませる。隣国との軍事的な緊張が高まる中、その時代の空気と相まって、町は不穏な空気をかもし出していた。

この町は同盟国の大規模な基地がある戦略的に重要な土地だ。政治的な関心からこの町を取材していた桜井は、天野という少年に出会う。自称宇宙人の奇妙な少年は、例の殺人事件に興味を示す。生き残りの娘、立花あきらは自分の仲間だというのだ。

加瀬真治は仕事も辞め、毎日ぶらぶらと散歩するばかり。しかし脳の障害は明らかに快方に向かっている。そしてある日、真治は鳴海に告白する。自分は宇宙人であると。

■ノート

＊シーンの切り替えは迅速が好ましい。全体の緩急のために、あるいは時間経過を示すために、数回暗転を入れてもいい。

＊ト書きに、登退場の指示はほぼ無いので、演出で決める。
基本的には会話に参加している人物でシーンが構成され、会話が終われば退場する。しかし、それぞれの場所で事態が進行していく群像劇のため、その限りではない。
例えば２０１７年の上演では、会話が進行するシーンの背後で、先のシーンや、その後のシーンの登場人物が、別空間として時間を過ごしているのが、後景として見えている。それは散歩する真治、苦しむ明日美、病院の車田とあきら、徘徊する天野など。事態が徐々に進行していることを視覚的に重ねて表現した。

■1

海岸線。夜。桜井はふらふらと歩く加瀬真治を目にする。
真治の衣服は汚れ、裸足。踵は血がにじんでいる。手には金魚の入ったビニール袋を提げている。桜井は真治が気になり話しかける。

桜井　あのぉ、大丈夫ですか？
真治　大丈夫です。
桜井　何してるんですか？
真治　散歩です。
桜井　足、血が出てますけど。
真治　そうなんですよ、面倒臭いですよね。

まるで他人事のように言う真治に、桜井は違和感を感じる。

桜井　んん～。痛くないんですか？
真治　痛い？　いたい、痛いです。
桜井　そうかそうか。え、何してんですか？
真治　散歩です。
桜井　ですよね。……ええと、病院と、警察、どっちがいいですか？
真治　ああそれはもう、お任せします。
桜井　じゃ一応警察で。
真治　つかぬことをお伺いしますが、この人、知ってますか？

真治は金魚の入ったビニール巾着を掲げる。桜井は金魚に目を凝らす。

桜井　ええとですね、それはぁ、金魚。人じゃないですね。それに僕も三日前にこの町に来たばかりなんで、すいません。
真治　そうですか。
桜井　ペットショップなら、似た人いるんじゃないですか。良くある種だし。今、車回してきますから、ね、いいですか、行きましょう。それから、その金魚、死んでますよ。

真治は不思議そうに金魚を見る。暗転。

■2

病院。病室のベッドに腰掛ける真治と、それを見る加瀬鳴海がいる。
真治は入院着を着、両の踵に包帯を巻いている。

鳴海　真治。……真治？
真治　はい。なにか？
鳴海　なにかじゃなくて。私のこと分かる？
真治　ええ、カセナルミさんですよね。ご無沙汰しています。
鳴海　ああ……うん。あの、自分の名前は？
真治　私はカセシンジといいます。あなたと、名前の一部が同じですね。
鳴海　当たり前でしょ夫婦なんだから。冗談は止めて。
真治　冗談は一つも言ってません。
鳴海　……ふざけてるの？
真治　ふざけてませんけど。
鳴海　いい加減にして。
真治　怒ったんですか？　もしそうなら謝ります。
鳴海　ちょっと真治、真面目に。
真治　……真面目に、なんですか？
鳴海　……あの、これ、着替え。（服をベッドに置く）
真治　着替え？
鳴海　服。あなたの。
真治　私の。服。これが。
鳴海　ちょっと先生と話してくるね。
真治　どうぞ。

真治は服を着替え始める。
鳴海は診察室の車田との会話に移る。真治は二人の会話を聞いていない。

車田　どうでした、ご主人は？
鳴海　どうっていうか、その、キャラ、変わってるんですけど。
車田　しびれやマヒも出ていないし、血管性の脳障害ではないと思うんです。人格が変わっているという点から、可能性としてはアルツハイマー。でもどちらにしろ、画像診断で脳の萎縮が見られるのが普通です。
鳴海　どうだったんですか？
車田　特に異常は。でも症状からはそうなんです。ええ。行方不明になる前、なにか、兆候のようなものは、ありませんでしたか？

鳴海　さあ。
車田　時々ぼーっとするとか。
鳴海　ああぁ……。
車田　つまづいたり、よく物を落としたりとか。
鳴海　いや、どうですかね。

鳴海の言葉も歯切れが悪い。それを不思議に思う車田。

車田　あの、いいですか、大事なことなんです。何でもいいので、その、日常生活で気になった、変化というか――
鳴海　知らないんです。ほとんど、別居だったんで。……すいません。
車田　いえ。
鳴海　三日間、何してたんでしょうか、あの人は？
車田　散歩だそうです。
鳴海　散歩って、散歩ですか？
車田　ええ。三日間歩き続けたみたいです。踵が、ひどい靴擦れでした。食事も取ってなかったようで、かなり衰弱してましたね。
鳴海　病院には自分で？
車田　いえ、警察に保護されて。やっぱり様子がちょっと、おかしかったみたいです。
鳴海　そうですか……。
車田　まぁ一時的なものならいいんですが、その、進行性のものなら今後色々、準備が必要になりますので、心構えをしていた方が。
鳴海　え、それは？
車田　家族のサポートです。つまりその、介護です。
鳴海　……介護。
車田　ええ。

鳴海は介護という言葉に驚き、呆然とする。
車田との会話は終わり、鳴海は再び病室の真治との会話に移る。
真治はぎこちない手付きで服を着ている。

鳴海　どうするの、会社。顔出すの、今から。
真治　会社。会社は行きません。
鳴海　自分で電話してね。私やだからね。
真治　何がですか？　（ネクタイを締めようと首にかける）
鳴海　会社。ボタン。（真治はシャツのボタンを掛け違えている）

真治　え？
鳴海　ボタンずれてる。
真治　あぁぁ。え？
鳴海　ボタンがずれてる！
真治　ああ、はい。なるほど。（鳴海はネクタイを引き取る）ああ。
鳴海　会社行かないんでしょ？
真治　ええ。ありがとうございます。（笑顔を見せる）

鳴海は今後を考え、漠然とした不安に襲われ、ため息をつく。

真治　どうしました？
鳴海　その、どう接していいか、よく分かんないんだけど。
真治　どうかお気になさらず。
鳴海　あの、真治で、いいんだよね？
真治　もちろんです。カセナルミさん。
鳴海　うん、じゃあまず敬語は止めない？　それとフルネームで呼ぶのも。
真治　いいよ、分かった。じゃあどうしよ、鳴海、でいいかな？　それとも鳴海、ちゃん？　さん？
鳴海　あぁ、うん、いやあの普通に、あれで、鳴海でいいんだけど、うん。

鳴海は予測できない真治の言動に戸惑う。

真治　鳴海と、真治ね。
鳴海　うん、そうだね。……あの、ほんとに真治？
真治　当たり前だろ。
鳴海　真ちゃーん？
真治　はーい。
鳴海　真ちゃんて呼ばれるの嫌いだったよね。
真治　そうなの？
鳴海　えちょっと何なの？　真面目に。記憶は？　記憶はあるんだよね？　ふざけてるんじゃないよね？　ほんとに病気？　なんなの？　ねえ、ちょっと、お願いだから。
真治　……お願いだから、なに？　それと、どの質問から答えたらいいの？
鳴海　ほんと、ひどいよね。
真治　何が？
鳴海　何がって、何にも知りませんみたいな顔して。
真治　記憶はしっかりしてるよ。

鳴海　なに、そんな勝手に、リセットされたみたいになってて、ずるくない？　えなに、私はどうしたらいいの？　だって病気とか言われたら、何か……、ずるくない？

真治　ずるい。……ごめん。質問の意味がよく分からない。

鳴海は困ったような真治を見つめている。

鳴海は真治に寄り、シャツのボタンを直す。

真治　ありがとう。

鳴海　真ちゃん。これからは真ちゃんて呼ぶ。いいね。

真治　いいよ。

鳴海　じゃあ真ちゃん、私はなに？

真治　鳴海。

鳴海　うんそうだけど、他になんかあるでしょ？

真治　人間の女で、日本人で、生年月日は――

鳴海　そうじゃなくて、私はあなたの、何？

真治　んー、質問の意味が分からない。

鳴海　私はあなたの妻、奥さん、配偶者、分かる？　ねえ真ちゃん聞いて。これから、ひょっとしたらこれからずっと、私はあなたの面倒を看ていかなくちゃいけないの。だからいい？　これからは私の言うことをちゃんと聞くように。ね、頼むよ。……大丈夫、私も一回リセットするから。まぁ今一番しんどいのは、あなた自身だと思うし。だからまぁ、とりあえず、頑張ろ。

真治　（鳴海をまじまじと見詰める）君はいい人だね。

鳴海　は？

真治　一つお願いがあるんだけど、俺のガイドになってよ。

鳴海　ガイド？

真治　そう。俺と仲間になろう。ちょうどガイドを探してたんだよ。

鳴海　ガ、はい？

真治　君は俺の面倒を見る。ちょうどよかった。俺は鳴海をガイドにするよ。よろしく。これからは、ずっと一緒だ。よろしく。

鳴海は呆気にとられている。

■3

鳴海の実家、船越家。加瀬家とは近所。
鳴海の母と姉の明日美、婿入りした夫の浩紀が住んでいる。
居間。鳴海、明日美と浩紀がいる。

明日美　ガイド？　何それ。なんのガイド。
鳴海　よく分かんない。
浩紀　ん～。でも、脳の障害だってのに脳に異常が無いってのは、おかしいだろ。
鳴海　うん、まぁ他の検査の結果見てなんだけどね。
明日美　精神的なものじゃないの？
鳴海　精神的にはしっかりしてるって。
明日美　あれで？　ちょっと大丈夫なの？　他のお医者さんにも診てもらった方がいいんじゃない？　ほらあるでしょ、あのぉ……あれよ、ね。
浩紀　セカンド・オピニオン。
明日美　そうそうそう。ちょっと遠いけどあそこいいんじゃない、ほら去年、お母さんが入院した。
鳴海　いいよ、明後日再検査もあるから。
明日美　そぉお。
浩紀　でもまぁ、今のところ原因不明ってことだからね。
鳴海　ん～。
浩紀　……しかし何と言うか、おっきな子供って感じだな。
鳴海　ほんとそうなの。好奇心の固まりっていうか。昨日なんてスーパーに連れてったら大喜びで。なんか魚屋のおじさん質問攻めにしちゃって。ブリとハマチの違いは何だって。
浩紀　（笑）どうでもいいわ。
鳴海　（苦笑）ほんとに。
明日美　どうでもよくないでしょう。
浩紀　ええ、だってあれ同じだろ？
明日美　同じだけど、名前が違うってことは違う理由があるのよ。
浩紀　何が。
明日美　大きさが全然違うでしょ。ねぇ（鳴海に）。
浩紀　でも同じ魚だろ。
明日美　違うから。出世してるから。
浩紀　あぁ、でも俺出世しても名前変わらないぞ。
明日美　変わってるじゃない、巡査部長とか警部とか。
浩紀　じゃなに、ブリとかハマチとかは役職なの？
明日美　そういう話じゃなくて。味が違うから。

浩紀　ほぼ同じですよ。
明日海　じゃもういい、買ってくる。今日はブリとハマチにするから。
浩紀　別にいいけど。
明日海　ね。鳴海達も食べていきなさいよ。あなたブリとハマチの違いも分からないのに寿司屋で「俺カンパチが一番好きなんだよねー」とか言わない方がいいよ。
浩紀　魚の話やめない？
明日美　ね鳴海、晩御飯。たまには、真治君も一緒に。
鳴海　あぁ、うん。
明日美　とにかく、いつでも来ていいんだからね。一人で抱え込むことないから。
浩紀　そうだよ。
鳴海　ありがと。
浩紀　でも、三日間か。何があったんだろうな。
鳴海　散歩って言うだけで。
浩紀　失踪した日は？
鳴海　日曜。
浩紀　縁日の日か。
鳴海　縁日には行ってたみたい。
明日美　私達も行ってたよ。真治君見た？
浩紀　いや。でもその情報はどこで？
鳴海　警察に保護された時、手に金魚を持ってたんだって。こう、金魚すくいのやつ。

真治が部屋に入って来る。

明日美　こんにちは、真治君。
真治　ああどうも。元気？　まぁゆっくりしてってよ。
明日美　ここはね、私の家なのよ。
真治　そっか、そうなんだ。
浩紀　はは……。真治君、ここがどこか分かるかな？
真治　うん、鳴海の実家でしょ。
明日美　あ、それは分かってるんだね。
真治　ちょっと待ってよ、俺大丈夫だから、全然問題ないから、ね、明日美。
鳴海　明日美さん、でしょ。なんで呼び捨てなのよ。明日美さん。
真治　明日美さん。
明日美　明日美さんです。こちらは？
真治　浩紀。
鳴海　浩紀さんね。

真治　ごめんね浩紀、さん、間違った。
浩紀　はは、随分フランクになったね。
鳴海　すいません。
浩紀　いや、いいんだよ。
真治　なんで今謝った？
鳴海　悪気は無いの。ごめんね。
浩紀・明日美　大丈夫大丈夫。

浩紀と明日美は真治への対応に困る。

浩紀　大変だな、これは。
鳴海　（苦笑）はは。
真治　これはって、何が？
浩紀　いや、うん、いろいろね。
明日美　真治君、いいのよ、気にしないで、あなたは病気なんだから、困ったことあったら、なんでも相談して。ね、家族なんだから。
真治　家族？　君達が？
浩紀　そうですよ。
真治　んん～。（考え出す）
鳴海　あぁ始まった。
明日美　え？
真治　じゃあ一つ教えてほしいんだけど、明日美さんと浩紀さんは、俺の、何？
鳴海　ごめんね。
明日美　ううん全然。
真治　二人は、夫婦なんだよね。俺と鳴海と同じだ。で明日美さんは鳴海の、姉だ。そして浩紀さんは俺の、兄だ。ほんとに？
明日美　そうだね。あってるね。
浩紀　血縁のこと？
真治　ああそうそう血縁。これもなんですよ。
浩紀　うん何が知りたいんだろ――
明日美　あのね、私と鳴海は、同じお母さんとお父さんから生まれているの、でもちょっとだけ私の方が早く生まれちゃったの。
真治　時間的に？
明日美　そうだから私が姉で、鳴海が妹。
真治　でも俺には、姉も兄もいない。
明日美　うんまぁ、そうね、でも私の妹と結婚した真治君は、私の弟ってことになるの。だから

姉の私と結婚した浩紀も、真治君にとって、兄になるってわけ。それが、家族でしょ。

子供を相手にするように説明を続ける明日美。真治は真剣に聞く。

真治　あぁ繋がった繋がった。で、家族ね。ありがとう。
明日美　どういたしまして。
真治　そっかそっか、姉か。血縁、そして家族。……親戚ってやつだ。
明日美　おぉそれそれ。
真治　確認するよ。いいかな。鳴海はあなたの、なに？
鳴海　真治いい加減にして。
真治　なに？
明日美　妹です。
真治　妹とは？

真治の語気は更に強くなる。その気迫に押される明日美。

明日美　え、真治君？
真治　それは、なんだ？
明日美　だから――
真治　ありがとう。それを貰うよ。

その瞬間、明日美の中から、姉妹、血縁といった概念が抜き取られる。
真治は奪った概念を瞬時に理解する。
明日美の目から涙がこぼれる。明日美は驚き、目頭を押さえる。
概念を奪われた人間は、意思とは無関係に涙を流す。

浩紀　どうした？
明日美　え、いや分かんない。あれ、ゴミでも入ったかな。うわ。(涙が溢れてくる)
浩紀　おいおい。
明日美　違う違う、あれ、なんだろ、はは、ちょ、目ぇ洗ってくるね。

目を押え、居間を出て行く明日美。鳴海と浩紀は奇妙に思う。

浩紀　なんだあいつ。

鳴海と浩紀は真治を見る。

真治　ごめん、鳴海の大切な人だと知らなかったんだ。
鳴海　……どういう意味？
浩紀　何の話してたっけ？
鳴海　……あの、やっぱり今日は、帰ります。
浩紀　え晩飯は？　かなりやる気なんだけど。
鳴海　ああぁ。
浩紀　食べてきなって。どうせ聞かないよあいつ。
鳴海　はは。お姉ちゃん。　お姉ちゃーん！

明日美が目を拭きながら戻る。入り口で立ち止まり鳴海を見る。

浩紀　鳴海ちゃんなんか帰るって今日。
鳴海　ごめんね、ご飯は今度にする。
明日美　……あそう。分かった。……じゃあね。
鳴海　うん。じゃあ。

鳴海は明日美の態度に、僅かな違和感を感じる。

■4

飛行機の飛ぶ轟音がする。そして静かな波の音が聞こえる。
海岸。丸尾と長谷部がいる。砂浜と防波堤の向こうには海岸に沿って国道が走る。
国道を挟んで丸尾家がある。丸尾にとって海岸は庭の延長のようなもの。

丸尾　君も暇だね。休みの日にわざわざ。
長谷部　いや、どうしてっかなと思って。
丸尾　先週も来たじゃない。
長谷部　そうだっけ。
丸尾　引き続き自由を謳歌してますよ。
長谷部　いいっすね。
丸尾　君なに、他に行くとこないの。
長谷部　いやぁ、特に無いっすねぇ。
丸尾　パチンコとか。
長谷部　足洗いましたね。
丸尾　釣りとか。
長谷部　こないだ竿バキ折れちゃって。
丸尾　バトルで？
長谷部　自転車の、車輪に巻き込んじゃって。
丸尾　切ないね。
長谷部　チャリのスポークもいっちゃって。坂道で、スピード出てたんすよ。
丸尾　竿手持ち？
長谷部　はい。
丸尾　危ないよ。
長谷部　ぐらっときて、あってなったら巻き込んで、がって前輪ロックして吹っ飛んで、一回転っす。
丸尾　一回転？
長谷部　はい。
丸尾　怪我は？
長谷部　特に。綺麗に一回転して着地したんで。
丸尾　あ、ちゃんと元通りになる感じで、着地したんだ。
長谷部　はい。
丸尾　それすごくない。
長谷部　そうっすね。
丸尾　マジかよ。目撃者は？　誰か見てた？
長谷部　いや誰も。

丸尾　もったいない。すごい技出したのにね、ギャラリーゼロか。ミラクル無駄使いしたね。
長谷部　怪我なかったから、それだけでも。
丸尾　使ってない親父の竿あるから、持ってけば。
長谷部　ああ。最近してないの？　釣り。
丸尾　してないね。
長谷部　外出てる？
丸尾　いやぁ。ネットの方に、俺が救わなきゃならん王国が多すぎてね。
長谷部　ハローワークは？
丸尾　行ってるよ。目一杯失業保険はもらわねぇと。
長谷部　そうだけど、真面目に仕事探したら。
丸尾　この年になるとね、もう求人ないね。
長谷部　選びすぎじゃない。
丸尾　ていうか働く気ないし。
長谷部　丸尾君。
丸尾　君もあんな会社辞めたら。まだ二十代でしょ。このまま非正規で粘っても、いいことなんか無いって。いずれは俺と同じ目にあってお終い。今のうちに何か探しといた方が身の為よ。
長谷部　そっかー。
丸尾　そうだよ。
長谷部　なんか、丸尾君辞めてますます、息苦しくなりましたよ。残業増えるし、給料上がんないし。
丸尾　クソだよな。
長谷部　クソっすよ。
丸尾　辞めたら？
長谷部　そんな度胸ないっす。
丸尾　ま、あれだな、どのみちこのクソな社会も、もうすぐ終わるよ。
長谷部　なんで。
丸尾　俺の勘だと、近いうち始まるね、戦争。
長谷部　実際は無いと思うよ。
丸尾　じゃあなんでこんな、ベースに飛行機ガンガン来てんだよ。
長谷部　まぁ昨日のニュースでもそこの基地映ってたけど。
丸尾　新聞もニュースも、本当のこと書いてないね。おかしいだろ自衛隊の数も。
長谷部　うーん。あったとしたら、この町が最前線だね。
丸尾　そうなんだよ。
長谷部　やばいっすよね。
丸尾　やばいねぇ。いや、いい意味でね。

長谷部　え？
丸尾　だって戦争になったらさ、変わるよ世の中。全部リセットだよ。どうせなら徹底的にやってほしいね。そんで皆ゼロからスタート。
長谷部　それいいっすね。
丸尾　だろ。
長谷部　でも徴兵とかになったら？
丸尾　ま、それもある意味、求人だし。
長谷部　いやいやいや。リセットしてほしいけど、戦争じゃなくてもよくない？
丸尾　このままなんにも起こらないよりマシだろ。
長谷部　そうかもね。

ぼんやりと海を見る二人。丸尾が空に何かを見つけ、立ち上がる。

丸尾　ちょちょちょ。
長谷部　どうしたの？
丸尾　あれ。

丸尾は海の向こうを指差す。光る物体。長谷部もそれを見る。

長谷部　え、なにあれ？
丸尾　おおお、え？
長谷部　飛行機じゃないよね。
丸尾　ちょっとこれあれだな、ＵＦＯ的なあれだな。待って待って。

丸尾と長谷部は携帯電話を出して録画する。

長谷部　すげえ。
丸尾　あ、あ、あ、消えた。消えた。
長谷部　消えた。

丸尾と長谷部はかおを見合わせて笑う。

■5

船越家の居間。桜井、浩紀、明日美が話しながら入ってくる。

浩紀　東京からだと結構あるだろ。
桜井　空港からが長い。
浩紀　そうなんだよ。
明日美　時々は戻って来てるんですか？
桜井　ええ、実家には。
浩紀　じゃ顔出しなさいよ。
桜井　ごめんね。
明日美　三年ぶり？
桜井　そのくらいですかね。
明日美　元気にやってます？
桜井　全然元気ですよ。明日美さんもお変わりなく。
明日美　ありがと。こっちには仕事で？
桜井　ええ。そこのベースや自衛隊の取材ですね。最近ものものしいでしょ。
明日美　ね、何かアメリカの船まで来てるんですよ。あのぉ、ほら――
浩紀　イージス艦。
明日美　そうだっけ？
浩紀　そうだよ。でどうなの、食えてんの？　ジャーナリストでは。
桜井　まぁ、なんとかね。
明日美　あのまま警察いたらよかったのに。公務員が一番なんだから――
浩紀　だからそういうこと言うなって。
桜井　はは、あでも元警官ってのが結構役にたって、仕事はそれなりに。
明日美　じゃあいいんですけど。心配してたから。
桜井　まあ、ね、その内ばぁんと本とか出すんで、ええ。
浩紀　楽しみだよ。
明日美　でもほら、顔見せてくれてよかった。ね。
浩紀　（笑）違うよどうせあれだろ？　例の事件のこと聞きに来たんだろ？
桜井　いやいや、顔見に来たんだよ。まぁでも浩紀なら、裏話聞けるかなとは、思ったけど。
明日美　心中事件？
桜井　ええ。
明日美　結構近いんですよ。
桜井　おお、実際、どうだった？
浩紀　ひどいよ。現場の写真見たけど血の海だったね。
桜井　うわぁ、なにその婆さんボケてたの？

浩紀　全然。しっかりしてたって。
桜井　錯乱？
浩紀　分からん。ご近所も驚いてる。仲のいい家族だったみたいだし。それが息子夫婦を道連れにして自殺だからね。一人生き残った孫娘が可愛そうだよ。
桜井　まだ学生だっけ？
浩紀　ああ。
桜井　え、浩紀は関わってんの？
浩紀　捜査には関わってない。すぐ警視庁入ったから。俺は後始末くらいだよ、遺族のケアとか。
桜井　んー、自殺かほんとに。
浩紀　今んところ事件性は無いってことで、婆さんの無理心中で片が付きつつある。ただ、検視官が異常にこだわっていてね。
桜井　はいはいはい、なんて？
浩紀　ここのだけの話にしとけよ。
桜井　もちろんです。
浩紀　明日美は聞かないほうがいいかも。
明日美　えぐいの？
浩紀　うん、いや殺すだけならいんだけど、息子の体をね、なんか明らかに解体しようとしてるんだよ。
桜井　婆さんが？
浩紀　包丁とキッチンバサミ使って。
明日美　うわぁ。
浩紀　あとその婆さんのね、死に方が壮絶で、自分の腹を、裂いて、腸をこうオラオラ出しちゃってんのよ。
桜井　嘘でしょ。
浩紀　七十五の婆さんがだよ。
桜井　何やってんのよ。ダメだよ。
浩紀　検視官が引っかかってるのは、自分でそこまでやるかっていうことだよ。力の問題があってさ、人間ってのは自分の体を切ろうとしても、そこまで力は入らないらしいのね。でもその婆さんはためらい傷が無いどころか、骨までいって包丁が欠けてるんだよ。
桜井　包丁が。でもそれは息子夫婦を刺した時とか。
浩紀　ところが欠けた包丁の刃は婆さんの体から見付かってるんだよ。殺された夫婦が刃物を握った痕跡もない。
桜井　……婆さん。すごい婆さんがいたもんだね。
明日美　嬉しそうに言わないでよ。
桜井　すいません。え、それで娘は？

浩紀　今は病院で安静にしてる。ショック状態だな。なんせその修羅場を見てんだから。
桜井　そのトラウマでかいねぇ。
浩紀　警察や救急車が来た時、その子は血の海の中にぽつんと座っていた。
桜井　うん。
浩紀　そしてその子は虚ろな目で、両手に持つ何かをじっと見つめていた。父親の、下顎だった。
桜井　……いやいやいや、それは作ってるでしょ？
浩紀　作ってない作ってない。実話。どこにも書かれることの無い、実話だ。
桜井　なんということだ。
浩紀　その子はその、父親の下顎を持って、こう、顎ヒゲを引っ張ってたらしい。
桜井　何をやっているんだ娘よ。
浩紀　地獄絵図だよ。
明日美　楽しんでない？　あなたも。
浩紀　そして、その地獄絵図に駆け付けた救急隊員が、恐る恐るその子に話しかけた。そしたらなんて言ったと思う？　……「ごめんなさい、こんなことになるとは思わなかった」。
桜井　え、怖い。なにそれ、意味わかんないんですけど。
浩紀　謎なんだよ。
桜井　マジ怖え。

桜井は考え込む。

桜井　分かんねえなぁ。なんだそれ。その子には会えるの？
浩紀　やめとけよ。それに病院側が許可しないだろしばらく。
桜井　そうだよな。
浩紀　警察としても、彼女のこれからをサポートしなくちゃいけないし。
桜井　うん。
浩紀　終わり。よし忘れろ。
桜井　くそぉ、なんて話を聞いちまったんだ。
明日美　……その発言だと、なんか娘が怪しく思えちゃうよね。
桜井　思いたくなっちゃうよね。
浩紀　普通の女の子だったよ。
桜井　会ったの？
浩紀　寝てたけどな。鎮静剤で。可愛そうだよ。
明日美　ほんとね。
浩紀　まぁいいよ、それはもう。で、桜井も教えてくれよ。
桜井　なにを？

浩紀　この町のことだよ。調べてんだろ？
桜井　ああ、結構やばいね。
浩紀　あ本当。
桜井　やばいよ。
浩紀　そうか。
桜井　うん。
浩紀　……それだけ？
桜井　うん。
浩紀　少なくない？　情報。
桜井　いや、だって、知らないから取材に来たわけだし。どうなの？　この町。
浩紀　知らねぇよ。
桜井　まぁ変な施設たくさん出来てるし。やばいことは確かだな。
浩紀　なんだおい、用途不明の施設に、一家惨殺事件に、昨日は何か変な電話くるし。おかしいだろこの町。
桜井　変な電話って？
浩紀　未確認飛行物体。ＵＦＯだぁって。
桜井　ああ、それ、どうやらお隣さんのミサイルみたいよ。
明日美　ほんとに？
桜井　もう発表されてると思うけど。
明日美　連絡来てないの？
浩紀　え、誤射とかだろ？　ミサイル。
桜井　そこまでは。
浩紀　ちょっと待てよ桜井、知ってること全部教えろよ。
桜井　いやそれくらいだって。
浩紀　俺結構話したよね。
桜井　情報下りてこないんだよ。大手メディアもぬるい報道しかしないし、なんかマジで規制かかってるっぽいな。
明日美　え、でも本当に戦争とかはないよね？
浩紀　そこまで馬鹿じゃないでしょ。
桜井　まそういう認識で大事故って起きるんだけどね。
浩紀　やなこと言うなお前。
桜井　真面目な話、俺なら引越しを考えます。
明日美　無理だよ。
桜井　じゃあ反戦運動でもします？　では俺はこのへんで。
浩紀　いやいやいやいや、駄目だろお前。
桜井　（笑）なんでだよ。

浩紀　メシ食おう、メシ。お前おかしいだろ情報量的に、え。全部吐けよお前知ってること。

桜井　（笑）いやちょ、ほんとに、勘弁してよ。

浩紀は桜井を追い立てる。三人は居間を出て行く。

■6

丸尾家の庭。敷地内をうろつく真治。気になり、丸尾も出てくる。

丸尾　ちょっと。……ちょっとお兄さん。
真治　俺ですか？
丸尾　そうです。
真治　何か。
丸尾　えぇと、何してんすか？
真治　いや別に。
丸尾　あ、別にじゃなくて、え、なんでここにいるんすか？
真治　いや、え？　君はなんでここにいるの？
丸尾　根源的な問いですよねそれ。まいいや、えーなぜ今私がここに居るかと言うと、ここが私の家だからです。マイホーム。
真治　ああそうですか。
丸尾　そしてここはウチの庭。
真治　散歩してたらつい。
丸尾　減るもんじゃないし、ま、いいんですけど、はい。

丸尾は真治を奇妙に思う。真治は丸尾に教えるように、海を指差す。

真治　海だ。
丸尾　海ですねえ。……あの、大丈夫すか？
真治　うん。大丈夫だよ。

丸尾は真治の隣に来て、一緒に海を見つめる。

丸尾　海、好きなんすか？
真治　好き？　好きなのかなぁ……。
丸尾　お兄さん？
真治　はい。
丸尾　お兄さんどっから来たの、名前は？
真治　真ちゃん。
丸尾　ん～とね、お兄さんくらいの年齢の人はね、自分のことを、ちゃん付けで呼ぶのは、あんまり具合よくないと思うよ。
真治　そうなの。仲間が、妻がそう呼ぶんだ。
丸尾　え奥さんいるの？

真治　鳴海っていうんだよ。
丸尾　負けた。帰ろう。真ちゃんも、家に帰りなよ。

丸尾が家に入ろうとすると、真治が着いてくる。丸尾は立ち止まる。

丸尾　なに？
真治　家に帰るんだよ。
丸尾　いや、さっき言ったよね、これは俺んち。
真治　マイホームだろ？
丸尾　……マイ！　ホーム。ユア！　ホーム。ゴー、アウェイ。
真治　なんて言ったの？
丸尾　消えろと言った。
真治　待って待って、教えてよ。よく分かんないんだ、どれも同じ家だ、同じ、俺の家だ。俺の家は別名真ちゃんの家で、自分ちとも言う。この家も自分ち、俺の家と何が違う？

真治は真剣に聞く。丸尾もそれに応える。

丸尾　面白いこと言うね。禅問答は嫌いじゃないよ。それに対する答えは、……人類は、真ちゃんが思うほど、皆兄弟じゃない。
真治　言ってる意味がよく分からないな。
丸尾　俺だって分かんないよ。
真治　なんて言えばいいんだろ、俺の家ってやつはなんで俺の家なの？
丸尾　それはあなたが住んでいるからでしょ。
真治　この家に住むことだってできる。
丸尾　いやできない。これは俺の家だから、丸尾家だから。
真治　丸尾？
丸尾　丸尾（自分を指す）。丸尾の家。
真治　そっか、丸尾の家か。
丸尾　分かってくれました？
真治　その家は？（並ぶ家を次々に指す）
丸尾　山田さんの家。
真治　その隣は？
丸尾　橋本さんの家。
真治　あれは？
丸尾　知らん人の家。
真治　知らん人の。……の。

真治は何かをつかみかけたように、考え込む。

真治　この「の」が問題だな。この「の」はなんだ？

丸尾　の？　……の、の。

真治　いいよ、そのままイメージして。

丸尾　の。僕の。マイ、所有格？

真治　言葉なんてどうだっていいよ。イメージして。君は分かっているんでしょ？

丸尾　なにを？

真治　それについて。

真治は考え込む丸尾の目を真剣に見詰める。

丸尾　それ？　マイ、ホーム？　の？　ん？

真治　それを貰うよ。

丸尾の中から「所有」という概念が失われる。真治はそれを理解する。

真治　ありがとう。分かったよ。これは俺の家じゃない。

丸尾　そういうこと。ん？　うわ、なんだ？

丸尾の目から涙がこぼれる。

丸尾　おおおぉ何だこれ。

真治　自分の家に帰るよ。

丸尾　あぁそう。大丈夫、帰れる？　迷子になったらタクシーを捕まえるんだよ。住所知ってる？

真治　知ってるよ。君はいい人だね。

丸尾　……真ちゃんは、あれだね、変わってるね。

真治　そうかな。

丸尾　なんか病気なの？

真治　うん。

丸尾　そっか。

真治　ホントは違うんだ。まだ慣れてないんだよ、この世界に。

丸尾　それかっこいいね。

真治　俺はね、宇宙人なんだ。

丸尾　（笑）やっぱり。昨日見たよＵＦＯ。
真治　（笑）またね。

立ち去る真治に丸尾は手を振る。長谷部が庭に入ってくる。

長谷部　丸尾君。
丸尾　どうした？
長谷部　テレビ見ました？
丸尾　いや、なんで？
長谷部　昨日俺等が見たＵＦＯ、テレビでやってますよ。
丸尾　マジで？
長谷部　臨時ニュース。十五分前。
丸尾　やったじゃん。お迎え来たか。
長谷部　あれＵＦＯじゃないです。ミサイルなんすよ。敵さんの、ミサイル。
丸尾　ミサイル？

長谷部は丸尾のリアクションを期待するが、反応は鈍い。

長谷部　どうしたんすか？
丸尾　なにが？
長谷部　なにがじゃなくて。自分で言ってたじゃないすか、戦争が起こればいいんだって。目の前すよ？　肉眼で見える距離に、ミサイルが飛んでんすよ。いよいよですよこれ。
丸尾　いよいよか。……戦争？　マジで？　やったじゃん。
長谷部　やってくれたよ。
丸尾　（笑）ははは、ミサイルかあれ。
長谷部　ミサイルだよ。
丸尾　面白くなってきたじゃないの。
長谷部　笑えないっすわー。
丸尾　じゃあ俺たちもポチっといきますか？　人生リセットボタンだ。
長谷部　はは（笑）、マジでやばいわこの町。
丸尾　……ほんとにな。

飛行機の轟音が二人の声をかき消す。二人は空を見上げる。

■7

数日後。船越家の居間。明日美と真治がいる。
真治は新聞を読んで記事を切り抜いている。それを見る明日美。

明日美　楽しい？
真治　……いいえ。
明日美　じゃ止めたら。
真治　仕事なんです。
明日美　それはリハビリっていうのよ。
真治　リハビリ？　……リハビリ。

真治はリハビリという言葉をメモする。
明日美は切り抜きの一枚を手に取り、見る。

明日美　経済に興味があるの？
真治　興味があります。
明日美　あなた投資とか分かってる？
真治　分からないので、興味があります。
明日美　あそう。(他の切り抜きを取る)これなら教えてあげられそうだけど。クラシック音楽の魅力。
真治　詳しいんですか？
明日美　普通に好きだけど。
真治　そうか。いや、結構です。お姉さんには聞きません。
明日美　あそう。じゃ勝手にしたら。
真治　勝手にします。
明日美　そのお姉さんて止めてくれる？
真治　はい。
明日美　あんま言いたくないんだけどね、あんた達さ、いつまでウチに来る気？　いやウチにもね、生活があるのよ。
真治　生活がある……？
明日美　あんたに言っても無駄か。
真治　明日美さん。俺、散歩に行きます。
明日美　行ってらっしゃい。どこにでも。

真治は出て行く。鳴海が入ってくる。

鳴海　お姉ちゃん。真治は？
明日美　その辺にいない？
鳴海　いない。
明日美　庭じゃない。
鳴海　いないから、どこにも。
明日美　そういえば散歩行ったかも。
鳴海　行かせないでって言ったよね。
明日美　聞かないのよ。
鳴海　だったら一人で行かせないで。
明日美　私も忙しいの。
鳴海　分かるけど。また人んちの洗濯物取り込んだりしたら困るでしょ。
明日美　私だってあんなのと一緒に歩きたくないのよ、恥ずかしい。
鳴海　は、恥ずかしいってなに、ひどくない？
明日美　ひどいのはどっちよ、私に押し付けて。
鳴海　ちょっと見ててってだけでしょ。
明日美　見てたって。
鳴海　お姉ちゃん。
明日美　お姉ちゃんお姉ちゃんうるさい。
鳴海　お願い。子供といっしょなの。
明日美　大丈夫だって。あなたが思うよりしっかりしてるから。
鳴海　……とりあえず、探してくる。

鳴海は出て行く。浩紀が入ってくる。

浩紀　おい、夕方鳴海ちゃんから電話あったけど、見つかったの？　真治君。
明日美　知らないよ。
浩紀　……どうしたの？
明日美　なにが？
浩紀　うん。あれだよ、鳴海ちゃん今大変なんだからさ、あのお、助けてあげないと。
明日美　分かるけど。でも何で私ばっかり？
浩紀　いや家族じゃないの。身内があれしてあげないと、きついって。
明日美　……それどういう意味？
浩紀　どういう意味って、え？
明日美　身内だから何？
浩紀　いやいやいや、お前だろ？　困ったらいつでも面倒見るって言ったの。
明日美　言ったけど、遠慮ってものがあるでしょ常識で考えれば。いつでも遊びに来てください

ねーって言われたからって毎日来る人いる？
浩紀　ここは鳴海ちゃんの実家でもあるんだから別におかしくないだろ？
明日美　……何言ってんの？
浩紀　え？　いや俺間違ったこと言ってるか？
明日美　なに、私が悪いの？
浩紀　そうじゃなくて。……妹だろ？

明日美は浩紀の言うことが部分的に理解できず、苦しむ。

明日美　浩紀ごめん、あの、分かるように言って。

浩紀は明日美に感じた違和感を自覚する。
船越家の場面はここで終わり、二人はよきところで去る。
真治が散歩している場面が挿入される。
病院で車田が電話をかける場面が挿入される。

車田　（留守電になり）金輪総合病院の車田と申します。ご主人の経過はいかがでしょうか。先週お見えにならなかったのでお電話させていただきました。ええ幾つか、気になる点ございますので、ご連絡いただけたらと思います。えー、失礼いたします。

街のどこか。鳴海は、散歩していた真治を見つける。

鳴海　今何時だと思ってるの？
真治　（腕時計を見る）十時八分五十二秒。
鳴海　時間を聞いてんじゃない。
真治　聞いたじゃん。
鳴海　勝手に出歩かないで。
真治　無理だよ、仕事しないと。
鳴海　仕事なんてどこにあるのよ今の真ちゃんに。今日会社行ってきたよ。早い話、辞めて欲しいって。病気の場合は何か手当てあるらしいから、保険の手続きしてくれって。
真治　へぇ。
鳴海　大変だよこれから。分かってんの？
真治　よく分かんない。
鳴海　……。携帯持ってってよ（携帯を渡す）。お姉ちゃんに何かした？　怒らせてない？
真治　怒らせてはいない。
鳴海　もうちょっとしっかりしてくんないときついんですけど。私も仕事増やさないといけな

いし。

鳴海は今後を思うと憂鬱になる。疲労も溜まっている。

真治　疲れたの？
鳴海　……踵、また血が出てる。
真治　ほんとだ。
鳴海　痛くないの？
真治　痛い。
鳴海　明日新しいスニーカー買おっか。
真治　スニーカー？
鳴海　歩きやすいんだよ。
真治　そうなんだ。
鳴海　知らない？
真治　知ってるよ。
鳴海　（笑）……毎日散歩して何してるの？
真治　仕事。
鳴海　仕事って？
真治　色んな人と話すんだよ。
鳴海　へぇ。私とじゃ駄目なの？
真治　鳴海はガイドだからね。
鳴海　そのガイドっての止めてくんない。運転手じゃないんだから。
真治　鳴海はいい奥さんだよ、俺は君だけが頼りなんだ。
鳴海　初めて聞いた、そんな台詞。
真治　心配すんなよ。もう少ししたら、きっと今より、よくなる。だんだん分かってきたんだよ。

真治は鳴海に触れる。鳴海は少しして、その手を払う。

■8

病院。立花あきらの病室。
窓際に立つあきら。それを見る車田。

車田　おはよう。気分はどうですか？
あきら　……。
車田　点滴は？　駄目ですよ、自分で取ったりしたら。
あきら　私は今どこにいますか？
車田　病院です。
あきら　病院。
車田　そう。あなたはね、丸五日も寝てたんです。
あきら　寝ていたわけじゃないです。馴染むのに時間がかかった。この体。
車田　何か、覚えてますか？
あきら　覚えてます。体が、壊れた。

車田は対応に困る。あきらは車田をじっと見る。

あきら　あなた、偉いですか？
車田　え？
あきら　偉いですか？　強いですか？
車田　（苦笑）いやどうだろ、まぁそれなりの立場では、どうして？
あきら　あなたは私の仲間、じゃなくて、味方ですか？
車田　味方だよ、ここにいる人みんな、君の味方です。
あきら　へええ、ガイドやりますか？
車田　え？
あきら　私のガイド。
車田　ガイド？　ん～まぁそうだね、ガイド、分かりました。
あきら　ありがとう。

あきらはベッドに腰掛ける。

■9

丸尾家前の海岸。丸尾と長谷部がいる。

長谷部　その、何を言ってるのか良く分からないんですけど。
丸尾　だからなんだろ、始め、なんかこうすっぽりと何かを失ってしまったような、喪失感？　でもだんだんそれが気持ちいいというか、もともと要らなかったものなんじゃないかな、だからその、逆に解放感？
長谷部　だから何？　何から解放されたわけ？
丸尾　それが分からないんだよ。でも俺は確実に解き放たれたね。まるで翼が生えたみたいさ。
長谷部　（笑）なんですかそれ。
丸尾　目覚めちゃったんだよ、覚醒した、悟っちゃったんだな。
長谷部　ずいぶん遠くにいっちゃいましたね。
丸尾　付いて来てよ。
長谷部　無理です。
丸尾　どうだね、昨今。
長谷部　なにが？
丸尾　戦争だよ。
長谷部　やばいっすね。
丸尾　いやそうじゃなくて、なんか思うところ無いわけ？
長谷部　面白そうですね。
丸尾　そんなんでいいの？
長谷部　自分でしょ面白がってたのは。
丸尾　違うんだよ。あのさ、生まれてきた以上、やっぱなんかやらないとヤバイと思うんだよね。世の中間違ってることに気付いちゃったんだよ。
長谷部　はい？
丸尾　この戦争はやっぱおかしいと思う。
長谷部　待って待って、どうしたの？
丸尾　戦争反対じゃね？
長谷部　……どうしたんすか？　戦争になったら全部リセット、戦争オッケーって言ってたの丸尾君じゃないですか。
丸尾　長谷部君、俺が間違ってた。
長谷部　はあ？　なになに、怖いから急に。勘弁してくださいよ。
丸尾　今からでも遅くない。これからは反戦だよ。
長谷部　嘘でしょ。
丸尾　君も一緒に。
長谷部　いやいやいや。

丸尾　どうせ暇だろ。
長谷部　いや俺仕事ありますから。
丸尾　辞めたいんだろ？　自由になれよ。
長谷部　生活があるんで。
丸尾　長谷部君、俺はある人に会って変わったんだ。自分でも驚いているんだよ。その人と会って、俺は目覚めた。だからもう一度会いたい、君にも紹介したいんだ。彼はきっと俺に何かをしたんだよ、分からないけど、何かをした。
長谷部　どこにいるんすかそいつは。
丸尾　分からん。
長谷部　ええ？
丸尾　でもきっとこの町だ。彼は多分知的障害者だ、でもそれは、彼が特別な存在であることの証拠なんだよ。
長谷部　映画の見過ぎですよ。
丸尾　君も会えば分かる。彼を探そう。
長谷部　いやです。
丸尾　行こう。

丸尾は真剣。長谷部はしぶしぶといった顔。

長谷部　名前は？
丸尾　真ちゃん。
長谷部　子供？
丸尾　おっさんだ。

丸尾は走り出す。長谷部は追う。

■10

病院の入口。中から車田と桜井が、話しながら出てくる。

車田　だから駄目ですよ。
桜井　そこをなんとか。
車田　駄目です。面会は禁止されています。
桜井　じゃあ今どんな状態なのか、それだけでも教えてくださいよ。
車田　お答えできません。
桜井　お願いします。
車田　ワイドショーのネタを提供する気はありません。
桜井　そういうのじゃないので、本当に。
車田　じゃあ何の用があるんですか？　残されたあの子の気持ちも考えてあげてください。

車田は桜井を残し院内に戻る。天野がいる。
一部始終を見ていた天野は、桜井に近寄り話しかける。

天野　頭の硬い奴なんだよ。全然駄目。話になんないよ。

桜井は声に気付き、天野を見る。

天野　あなたもあれでしょ。立花あきらに会いに来たんでしょ？　なに違うの？
桜井　いや、そうだよ。君は？
天野　……君は、の下はなに？　ちゃんと喋って。
桜井　……君も、立花さんに会いに？
天野　会いに、なんだよ？　最後まで喋ってくれよ分かりづらいな。そういうの流行り？　まいいやホントは分かってるんだもう慣れた、言葉の先を類推することに。

桜井は天野の言動に当惑するが、直ぐに興味に変わる。

桜井　君だって僕の質問に答えてないじゃないか。
天野　立花あきらに会いたい。会いに来た。でも断られた。
桜井　じゃ僕と一緒だ。どうしようか？
天野　あなたは大人？
桜井　え、大人だと思うけど。
天野　どっちなの？
桜井　大人だよ。

天野　俺は悲しいことに子供なんだ。職業は？
桜井　記者、ジャーナリスト、ライター。分かる？
天野　分かるよ。……じゃあ物知りだ。いいね、そういうのを探してた。俺のガイドになって下さい。
桜井　ガイド？
天野　俺はどのみちあきらに会わなくちゃいけないし、目的は同じだよね。ガイドの契約してくれたらあきらに会わせてやるよ。独占取材。どう？
桜井　（笑）契約って君、すごいね、まるで悪魔みたいじゃないの。
天野　悪魔？　イメージが無いな。一応宇宙人てことになってるんだ内緒だけど。
桜井　宇宙人？　名前は？
天野　天野。
桜井　アマノ、星人？
天野　いや、星は関係ないんだ。
桜井　あぁそう。天野君。僕は桜井です。よろしく。
天野　よろしく。
桜井　ガイドってのは魂を売るわけじゃないよね？
天野　違うよ。ただ職業を持ってる大人の方が色々ことが早いでしょ世の中。だから桜井みたいなのが一緒だと助かるんだよ。
桜井　君だってすぐに大人になるよ。
天野　そんなに暇じゃないんだよ。
桜井　そうか。わかったよ、君のガイドをやろうじゃない。
天野　ありがとう。
桜井　で、立花あきらは天野君とどういう関係なの？
天野　多分仲間なんだよね。
桜井　仲間というと、宇宙人？
天野　そう。
桜井　多分っていうのは？
天野　三人で来たんだけど、ちょっと手違いがあってバラバラになったんだ。
桜井　ごめん、どこまで信じたらいいんだろう？
天野　どこまでも。俺は嘘は言わないよ、時間の無駄だから。嘘の一種である冗談や社交辞令も言わないよ。だから桜井もそういうのはやめて。面倒臭いから。
桜井　……君は高校生？　何歳？
天野　金輪西高一年、十六歳。
桜井　あ地元なんだね、宇宙人でも。
天野　他に質問は？　終わり？　じゃあこの病院に入る方法を考えようよ。
桜井　あ、もう一ついいかな？　その、君ら宇宙人は何しにきたの？

天野　調査。この世界固有の、概念を収集しに来た。
桜井　概念？
天野　そう概念。あ大丈夫、桜井からは奪わないよ、ガイドだから。
桜井　あ、そう、ありがと。え？　調査してどうするの？　まさか侵略するの？
天野　侵略するよ。宇宙人ってそういうもんだろ？
桜井　マジっすか。うわぁ地球やべえ。（笑）
天野　やべえよ。じゃ行こうか桜井。そこのファミレスで打ち合わせしよう。

天野は歩き始める。

桜井　天野君。
天野　なに？
桜井　そのぉ、一応僕年上なんで、呼び捨てはちょっと。
天野　桜井さんでいい？
桜井　あいいよ。ごめんね。
天野　気にしなくていいよ。
桜井　あ、はい。

天野と桜井はファミレスへ向かう。

■11

船越家の居間。鳴海と浩紀がいる。

浩紀　ごめんね。やっぱり今は会いたくないって言うんだよ。
鳴海　そっか。
浩紀　なんか鳴海ちゃんのことがよく分かんないらしくてさ、ま本人も苦しんでんだわ。
鳴海　よく分かんない。
浩紀　いや実はね、お母さんに対してもなんだよ。
鳴海　何が？
浩紀　おかしいんだ。接し方が今までと違うのよ、よそよそしいというか、何かあるとすぐ苛々するし。
鳴海　あぁお母さんからはちょっと聞いた電話で。
浩紀　あほんと、今朝大変だったんだよ、自分の親家から追い出そうとすんだから。
鳴海　えなにそれ？
浩紀　いや俺もさすがに、わけ分かんないよ。自分の母親の布団取り上げて、人んちで寝てんじゃねぇよって、怒鳴ってんだから。
鳴海　えぇ？（ショックを受ける）
浩紀　うん。まぁそれで病院行ってきたんだわ。
鳴海　どうだったの？
浩紀　原因はまだ分からんって。何か神経内科に回されて、色々検査や、問診を半日。それで分かったのはね――
明日美　こら！

明日美が部屋の入り口に立っている。

明日美　また来てんのあんた。いい加減にしないと警察呼ぶよ。
鳴海　お姉ちゃん。

明日美は咄嗟に耳を塞ぐ。

鳴海　お姉ちゃん――
明日美　あー（意味の無い言葉でかき消す）、帰ってください！　帰ってください！
浩紀　もう帰るよ、大丈夫！　上にいろって。な。明日美。

鳴海は明日美の態度に驚く。明日美は浩紀に促され、部屋を出る。

浩紀　はは（苦笑）、気にしないで。いや、あのね、原因は不明なんだけど、家族とか血縁に関することが、理解できなくなってるってことは分かってんだわ。……こういうのってさ、似てない？　真治君の時と。

鳴海　似てる。

浩紀　だよね。あれから病院には行ってるの？　良くなってんだよね、原因は分かったの？　俺も明日美にね、散々説明したのよ家族的なこと、でも全く理解できない。真治君は結構あれだよね、だから、どうしてんのかなって、うん。何か言われてる？　病院で。

鳴海　ごめん、病院全然行ってない。

浩紀　あそうなの。

鳴海　良くなってるからいいかと思って。医者からは来いって何度か電話あったんだけど、お金かかるし、いいやって。

浩紀　そうか、あでも、やっぱ確実に良くなってんだよね。

鳴海　そうだね。

浩紀　どうやって？　良くなってんなら、教えて欲しいんだよ。なんか増えてんだって、この手の患者。

鳴海　そうなんだ。

浩紀　うん、何でもいいからさ。

鳴海　……えっと、まず、記憶は全然問題なかった。

浩紀　そうだね、忘れてるわけじゃないんだよ。

鳴海　真治の場合は、分かんないこと沢山あって、怪我しても痛みが分かんなかったり、ご飯食べても味の表現ができなかったり、絵を見ても、何が書いてあるかは言えるんだけど、美しいとか、そういう感想が言えなかったり。

鳴海の話の中で車田が登場し、舞台は病院に変わっている。

浩紀　感情と結びつかない、ということですかね。

車田　そうですね。

鳴海　あと、冗談とか例え話は全然通じなかったですね。文庫本持ってきて、「ガラスの動物園」ってどういう状態？　て素で聞いてきたし、空気読んでよ、って言ったらこう、ぐっと、目ぇ開いて、読めないって。（真治の真似をする）

浩紀　あ、やんなくていいと思うよ。

車田　今は、通じるってことですか？

鳴海　結構通じますね。

車田　それは奥さんが教えて？

鳴海　いえ。

浩紀　じゃどうやって？

鳴海　いや、あの自分で、どっかで勉強してくるみたいですね。
浩紀　どっかって？
鳴海　散歩とか、そういう時です、かね。誰かに聞いて。
車田　はあ。
鳴海　帰ってくると時々、報告してくれるんで。空気を読む、の「空気」分かったよ、とか。
車田　自分で学習しているわけですか。
鳴海　ええ。性格は元に戻ってないけど、十日前と比べたら、かなりまともになりました。
車田　ん～。似てるけど、やっぱりご主人のケースはちょっと珍しいかなぁ。
鳴海　あ、でも、まだ全然、あれですよ、分かんないことだらけですよ、うちのも。
車田　いや、あのね、ちょうどご主人が保護されたあたりから、急にこういった症状の患者が増えたんですよ。ここだけでも三十人は。
浩紀　そんなに？
車田　大人から子供まで。皆、ある特定のことについて、思考することが困難になっているんですよ。何というか「概念」を失っているんです。例えば、リンゴもミカンも知ってる、果物という言葉も知ってる、でも果物とは何かと聞かれたら、具体的な知識と結びつかない。
鳴海　概念。
車田　恐らく。奥さんなら、親族関係というものを全く理解しませんよね。親子兄弟、言葉の意味は当然知ってる。でも実感として理解できない。だから肉親を見ると、怯えたり、敵意を向けたりする。自分の中にどう位置付けていいか分からないんですよ。
鳴海　家族なのに？
車田　家族だから、だと思います。他の患者さんでも、生活が困難になってる人が多いんですよ。その人にとって重要な概念が、駄目になってるケースが多くて。果物が理解できない八百屋さんや、お金のことが理解できない銀行員とか、いや笑いごとじゃなくて。ええ。他にも沢山ありました、季節、夢、嫉妬、人の心。いくら言葉で教えても理解できないんですよ。数や時間とかになると、もうどうしようもない。……徐々に、精神をやられますね。

頭の上を飛行機が通り過ぎて行く。轟音。上を見上げる車田。

車田　あと平和とか、戦争とか。
鳴海　……治るんですか？
車田　分かりません。だからご主人が回復してるなら、是非みてみたい。お願いしますよ。

鳴海は、増える患者と真治の回復の関連性を漠然と感じる。

■12

街。鳴海は病院の帰途、たたずむ。それを真治が見つける。

真治　晩飯どうする？　飲みにでも行く？　こないだ行った店よかったなぁ。日本酒はいいね、気に入ったよ。

鳴海　あなたはずっと前から日本酒党です。

真治　そっか。そうだった。（以前に比べ、軽妙な印象の喋り）

鳴海　あなたは、東北のちょっとくせのある日本酒が好きで、焼酎は九州のが一番だって、美味いものは北と南に集まってるって、酔っぱらうとよく言ってた。知ってる？

真治　まったくその通り。また北海道旅行したいな。

鳴海　覚えてるの？

真治　付き合ってちょうど一年目だったよね。楽しかった。結婚の約束もそこでした。

鳴海　……。今日病院行ってきた。真ちゃんみたいな人が増えてるんだって。

真治　俺みたいな人？

鳴海　それもこの町だけで。明日病院に来てくれって。

真治　俺はもう大丈夫だよ。

鳴海　うつる病気かもしれないから検査するみたい。

真治　病院には行かない。

鳴海　どうして？　行くとなんかまずいの？

真治　治ったからだよ。

鳴海　毎日散歩して何してるの？

真治　散歩して、会った人とお話してるだけだよ。俺は病気なんかじゃない、言葉でうつる病気があるか？

鳴海　……真ちゃん。

真治　大丈夫、鳴海はなにも心配しなくていい。俺たちは今、順調なんだ。

丸尾と長谷部が出てくる。二人は道端で話す鳴海と真治を見つける。

丸尾　真ちゃん。……やっと会えた。散歩は順調？

真治　順調だよ。久しぶりだね。

丸尾　久しぶり。探したよ。真ちゃん、紹介したい奴がいるんだ。

丸尾は長谷部に視線を送る。鳴海が会話に割り込む。

鳴海　ねえ、この人は何してるの？　散歩して、何してるの？

丸尾　解放ですよ。この社会に蔓延してる、蔓延してる何だクソみたいなものや、頭の中には

びこる害虫を駆除してるんだ。ねえ真ちゃんそうだろ？　真ちゃんは俺を解放してくれたんですよ。俺が社会に馴染めなかったわけじゃないんだ。今までが全部バグだったんだ、社会が、間違ってたんだよ。ほら見て、今じゃこんなに自由だ、体が軽いんだよ。

丸尾は真治に詰め寄る。

丸尾　ねえ真ちゃん。あなたはいったい俺に、何をしたの？

鳴海は丸尾の態度に気味の悪いものを感じ、真治への疑問と不安が膨らませる。

■13

ファミレス。天野と桜井がいる。

桜井　で、どうする？
天野　警察の知り合いがいるならなんとか頼めないかな。
桜井　まず無理だね。忍び込むか？
天野　現実的じゃないね。そんなこと思ってないんでしょ？　一番厄介なのは警察なんだよ。手荒なことはしたくない。
桜井　ごもっとも。
天野　記者ってのはなんかもっと、融通が利かないものなの？
桜井　君も見てた通り、見事に追い帰されたよ。君だって宇宙人なんだろ？　なんかないの？必殺技とか。目からビームくらい出してくれよ。
天野　目からビームは出ないよ。
桜井　冗談だよ。
天野　目からビームが出る人間はいるの？
桜井　会ったことないね、残念ながら。
天野　どっちなの？
桜井　いない。目からビームを出す人間はいません。
天野　じゃあ無理だよ。人間の体はそんなふうにできてないんだから。
桜井　ウルトラマンを見たことある？
天野　あるよ。
桜井　アレに出てくる宇宙人はもうちょっと無理するぜ。君は物分りが良すぎる。
天野　俺は調査に来ただけだからね。必要ない能力は持たされてないんだよ。
桜井　じゃあ君にはどんな能力があるの？
天野　だから言っただろ、概念を収集するだけだよ。でもね、面白い副産物があるよ。人はそれを失うらしいんだ。
桜井　どういうことだろ？
天野　俺たちは会話の中で未知の概念に出会った時、それについて質問するんだ。相手がその概念をしっかりと意識した時、それを学習することができる。言葉に頼らずにね。
桜井　言葉に頼らずに。
天野　だって言葉は色んなのがあるだろ、欲しいのはその概念の理解だからね。理解そのものをいただくんだよ。それが俺たちの能力。
桜井　なるほど、でその副産物ってのは？
天野　俺達が学習すると、相手はその概念を失ってしまうんだ、すっぽりとね。
桜井　概念を失う。……それホント？
天野　嘘は言わないよ。

桜井　失うとどうなるんだ？
天野　なんか、ちょっとだけ壊れるよね。
桜井　概念を奪う。それ、結構な武器だろ。
天野　知ってるよ。時間がない時間がないって言ってるおじさんがいたから、試しに時間の概念を奪ってやったんだ。
桜井　え、それはどうなった？
天野　止まっちゃったよ。今じゃゆっくりしてるんじゃないかな。あそれも時間の内か。
桜井　（笑）はは、え、冗談だろ？
天野　冗談は言わないよ。
桜井　いやぁ、うん。面白いよそれ。すごいね、全部自分で考えたの？
天野　考えたんじゃない。事実。疑うならいいよ、ガイド辞める？
桜井　あぁごめん。でもそれは、見せてくれないと信じられないよ、さすがに。
天野　じゃ見せてやるよ。
桜井　おお、自信あるね。
天野　当たり前だろ。ま、何を信じるかは自由だよ。
桜井　君はその自由という言葉の意味を知ってる？
天野　知ってるよ、奪ったからね。
桜井　その人はどうなった？
天野　さあ、不自由になったんじゃないかな。
桜井　（笑）面白ぇなぁ天野君。ガイドになってよかった、魂を奪われそうだよ。
天野　実はその魂ってやつはまだ良く分からないんだ。心とは別物なの？
桜井　うーん。
天野　あイメージしなくていいよ、ごめんごめん。桜井さんからは奪わない、ガイドだからね。
桜井　おおぉ、あっぶねー。そういうことか。
天野　それはまた今度、他の人から貰うよ。
桜井　よし、じゃあその力、試してみようか。

桜井と天野は病院へ向かう。

■14

病院。車田が出てくる。

車田　知り合いだったんですか？
桜井　ええ。この子は天野君といって立花あきらさんとは幼馴染なんです、お見舞いに来たってわけですよ。面会を許可していただけませんかね、心配してるんです。ね？
天野　うん。あきらが心配なんだ。
車田　心配してるなら今はそっとしておいてくれないかな。
桜井　彼の顔を見たら、少しは元気になるんじゃないかと。ね？
天野　うん。あきらを元気付けたいんだ。
車田　僕も彼女の為を思って言ってるんだよ。そんな風にキャラ変えても駄目なものは駄目だよ。
天野　駄目だってさ。
車田　私も忙しいのでもういいかな。
桜井　待ってください。……知ってますよ、立花あきらさん、目を覚ましたんですって？
車田　誰だって朝は目を覚ますでしょ。
桜井　眠り続けたらしいじゃないですか？
車田　どこで聞いたんです？
桜井　意識があるなら面会を禁止することないでしょう。
車田　あんな事件があったんですよ。精神状態が普通じゃないことくらい想像つきませんか？
桜井　精神状態ではなくて、人格に問題が起きていませんか？
車田　何が言いたいか分かりませんけど、とにかく面会は禁止です。
天野　さっきから禁止禁止言ってるけど、納得できないね。ちゃんとした理由を提示してくれないと。
車田　……さっきから言ってますよね。彼女の精神状態を考慮してです。
天野　それがなぜ禁止に繋がる？
車田　言ってる意味が分からないけど。
天野　禁止ってのは命令でしょ、なんであなたは俺たちに命令するの？
車田　それが仕事だからです。
天野　命令が仕事？　禁止することが医者の仕事か？　他にもっとすることがあるだろ、医者なんだから。
車田　患者のことを考えての判断です。口のきき方に気をつけなさい。
天野　また命令？　禁止ばっかりじゃ患者なんて救えないよ。
車田　この子は、なに？
桜井　すいません。ちょっとだけ彼の話を聞いてください。
天野　そもそも禁止って、なに？　ねぇ教えてよ。禁止で患者が救えるなら、あなたがその意

味を良く理解してなきゃいけないよね、それが治療の一環だっていうんだから。そうでしょ？

車田　禁止されてるから禁止なんだ。

天野　そんな説明じゃ小学生だって納得しないよ。大人はとかく考えることやめているからね。もう一度よく考えてみようよ、禁止と、それにまつわる色んなことを。そしてなんであなたは禁止するのか。ね、大人でしょ？　教えてよ。なぜ禁止する、なぜ命令する。

車田　あのな、それをしてはいけないと、命じることが禁止なんだ。

天野　辞書通りだな。言葉で言い換えることになんの意味があるの。ちゃんと考えてよ、納得できたら大人しく帰るからさ。

車田　あぁ、だからな――

天野　その調子。オッケー、それを貰うよ。

車田の中から禁止・命令に関する概念が失われる。呆然とする車田。

天野　どうだろう？

桜井　え？

車田　おとと。(涙が出る。目頭を押さえる)

桜井　どうしました？

車田　いや、なんでもない。おおぉ、なんだ……。

天野　生理現象。

桜井　え？

天野　で、どうだろ？　もう禁止する意味とか、関係なくなったんじゃないかな？

桜井　なにを奪ったの？

天野　言葉に意味はないよ。さ、もう一度聞いてみて。

車田　失礼。(涙を拭き終わる)

桜井　すいません、その、面会を許可していただきたいのですが。

車田　駄目です。

桜井　駄目だ。

天野　条件反射だよ。面会は何だっけ？　先生。得意なやつを聞かせてよ。面会は？

車田　禁止だ。

天野　その通り。じゃあもう一度聞くよ、禁止ってなに？　なぜ禁止するの？

車田　……禁止だから、禁止なんだ。

天野　その禁止って言葉に意味あるの？　意味なんてないよね？　案内してくださいよ、あきらの病室に。

車田　駄目だよ、とにかく禁止されているんだ。禁止なんだ。

天野　くそなんだよ、何で変わんないんだよ。

桜井　先生、禁止ってなんだか分かります？
車田　禁止は禁止です。（頭痛がする）
天野　ああもう面倒臭いな。
桜井　大丈夫ですか？
車田　ちょっと立ち眩みが。
天野　まぁいいやこうなったらどんどんいこう。先生、禁止は分かった、あんたも誰かに命令されてたんだな、じゃ誰が禁止してるの？
車田　わ、私が禁止だ。
天野　意味わかんないよその言葉。私って誰？
車田　私だ。
天野　なに先生主治医なの？　じゃあいいじゃん許可してくれても。何であんたはよくて俺は駄目なわけ？
車田　当たり前だろ。ああもういいかな、気分が悪いんだ。付き合いきれない。
天野　待て待て——
車田　いい加減にしろ！
天野　しないよ。なぜあんたはよくて俺は駄目なの？　俺とあんたの何が違うの？
車田　名前も顔も年齢も、立場も、収入も、全て違う！　お前のようなクソガキとは違うんだ俺は！
天野　でも同じ人間でしょ？
車田　俺とお前は、違う！
天野　違わない！　同じだ。
車田　違う。
天野　じゃあ説明して、なぜ俺とあんたは違うの、もっともっと根源的に説明してよ。分かりやすく説明して。最後のお願い、それが分かったらホントに帰る。私とあなた、君と僕、俺とお前、その区別、その関係、さあどうだ！　いってみよう！
車田　……あのな——
天野　真面目に考えろ！
車田　……。
天野　よし、よし。それを、貰うよ。

天野は車田から、自と他、その区別に関する概念を奪う。
再び呆然とする車田。桜井に笑顔を向ける天野。

桜井　何をしたの？
天野　自と他、その辺を区別する概念かな。ね。（車田を押す）

その場に跪く車田。涙を流す。吐き気もする。

天野　これは効いたんじゃない？
桜井　先生？　先生？　（車田を介抱する）
車田　うっうっ……。（嗚咽する）
桜井　どうして泣くんです？　先生？
天野　涙に泣かされているだけだよ。悲しいわけじゃない。
桜井　先生！
車田　……ああ、ごめん。あれ、ああ、なんだったっけな？　あれ？
桜井　立てますか？
天野　これで物分りがよくなったはずだけど。……先生、行きましょう、立花あきらのところに。僕は、彼女が、心配だ。（言葉をすり込むように）
車田　ああぁ、そうだね、彼女が心配だ。彼女のところに行こう。
天野　行きましょう。

天野は桜井に得意気な態度を見せる。

■15

病室。あきらがいる。桜井と天野が来る。

桜井　立花あきらさん？
あきら　そうです。

あきらをじっと見る天野。

あきら　だれ？　（天野を指す）
桜井　こちら天野君です。
天野　名前なんて関係ないよ。
あきら　んん？
天野　お前もそうなんだろ？
あきら　あ。
天野　やっぱりね。
あきら　どうも。
天野　なにやってんのこんなところで。
あきら　なんか大変なことになっちゃった。
天野　新聞見たよ。なんかもう、可愛そうな人になってるからね。
あきら　ええ？
桜井　あ、あの、すいません。
あきら　はい。
天野　桜井さん、俺のガイドにした。
あきら　へぇ。
天野　お前仕事できてんの？
あきら　全然。これからだけど。
天野　これからじゃねぇよ。
あきら　えなにが？
天野　え、ガイドは？
あきら　いるよ。
桜井　お話中すいません、あのぉ、宇宙人？
あきら　は？
桜井　宇宙人？
あきら　え、どういうことですか？
天野　いや宇宙人だろ俺等、どっちかと言うと。
桜井　仲間？

あきら　あぁ、はい。
桜井　マジで！
あきら　はい。
桜井　えマジで！
あきら　はい。
桜井　うわあぁ……。
あきら　なにこの人。
天野　俺のガイド。優秀だよ。
桜井　え、え、じゃあ立花あきらだけど、中身は別もんってことでいいんですかね？
あきら　中身？　あ最初ほら、なぁにあれ？　魚？
天野　金魚だね。
あきら　金魚？
桜井　金魚？
天野　最初こっちに来た時、金魚に入っちゃったんだよ、そういう形とかよく分かんなくて。
あきら　びっくりしたね。あ、これは違うぞと。いま自分をすくおうとしているこの大きな奴等が主だろうと、そう思ってこっちに移ったんだけど。
天野　どうする、あと一人未だに金魚だったら。
あきら　さすがにそれはないでしょ。
天野　とにかく探そう。
あきら　それが出してくれないの。
天野　主治医をちょっといじったから、なんとかなるだろ。
あきら　え、ちょっとそれ私のガイドなんだけど。
天野　そうなの？
あきら　取ったの？
天野　うん。
あきら　ふざけんなよ。どうすんのよ。
天野　知らねーよ。
あきら　知らねーじゃないでしょ。
天野　いいよ、ガイドは他探せよ。
あきら　はあ？　ここどうすんだよ？
天野　桜井さんがなんとかしてくれるよ。
桜井　あぁうん、立花さん、その、なんであんな事件が？　君等の存在と何か関係があるのかな？
あきら　事件？
桜井　言いにくいんだけど、君の家族はみんな亡くなっていますよね？　あれは？
天野　何がしたかったの？

あきら　私最初、もっと古い体だったのね。
桜井　それはお婆さんだったってこと？
あきら　そう。魚から移ったばかりで、まだ体がどうとか全然分かんなくて。
天野　自分で調べたんだ？
あきら　ざくざく切って調べちゃった。血がドクドク出て。初日だから全然わかんないのよ。面白いなぁって思ってたら、だんだんこれはヤバい状態だと気付いて、こっちに移ったの。
天野　体の道連れにならなくて良かったね。
あきら　そうなの。
天野　気をつけろよ。
あきら　すいません。
天野　桜井さん、他には？
桜井　あ、いや、聞きたい事が沢山あり過ぎて。
天野　まず場所を移した方がいいと思うんだ。退院の手続きを済ませてくれない。
桜井　そうだね、分かった。
天野　頼むよ。
桜井　天野君、ひょっとしたら、僕は最後の一人を知っているかもしれないな。会ったんだ、こう金魚を持って、散歩する……。

浩紀が入ってくる。

浩紀　なにしてんだ、こんなところで、え。
桜井　……いや。
浩紀　モラルの無い奴だな。
桜井　浩紀、違うんだよ。
天野　桜井さんいいかな、退院の手続きをしてよ。
浩紀　ちょっと待って、君は誰だ？
天野　天野だ。あなたは誰？
浩紀　学校の友達かな？　立花さんに君くらいの親戚はいないんだ。親族以外の面会はまだ——
天野　人の質問に答えなよ。あなたは誰？
浩紀　警察です。
天野　……（桜井に）お願い。
桜井　浩紀、事情は後で。
浩紀　いやいや、ここでなにしてんだよ。
あきら　早くしてくんない？
浩紀　立花さん、警察の者です。その、警察には、あなたのような被害者、遺族をサポートす

るプログラムがあるんです。今日はそれを――
あきら　私、昔のことにクヨクヨしないんです。
浩紀　はい？
あきら　もう立ち直ったので、どうかお構いなく。
浩紀　いいえ、立花さん。
あきら　私、今日退院しますので、どうかお構いなく。
浩紀　え、そうなんですか？
桜井　そうみたいなんだよ。俺もたまたま問い合わせたら症状が良くなったということで、面会を許可されて。ね。
あきら　そうです。

浩紀は桜井を疑う。

天野　先に出てるよ、後よろしく。（あきらと部屋を出ようとする）
浩紀　ちょっと待ちなさい。
天野　本人が元気だって言ってるよね？
浩紀　とにかくここを出ちゃ駄目だ。
天野　また命令だよ。医者とか警察って人種は困ったもんだな。
浩紀　君はいったいなんだ？　（天野をつかむ）
天野　なんだっていいでしょ。助けてよ、ガイドだろ。
桜井　立花さん、友達だよね彼は。
あきら　そうです。私の友達です。
桜井　な、浩紀、心配ない、だから、彼を放して。
天野　放してよ。
桜井　天野君黙って。

浩紀は状況を疑いながらも、手を放す。

桜井　浩紀、本当なんだよ、立花さんは今日、退院します。
浩紀　聞いてない。今から担当医に確認する。
桜井　分かりました。天野君、二人で先生呼んできてくれるかな。分かるよね？

天野とあきらは部屋を出ようとする。

浩紀　駄目だよ。

浩紀は付いて行こうとするが、桜井に腕をつかまれる。

桜井　逃げやしませんよ。（天野に）廊下は走るなよ。

天野　はーい。

天野とあきらは出て行く。浩紀は桜井の手をはらう。

浩紀　分かるように説明しろ。

桜井　何から話していいか。

浩紀　あの子がどういう状態か言ったよな。お前情けねぇぞ、ゴシップがやりたくて辞めたわけじゃねぇだろ、え、何考えてんだ。

桜井　分かってる。でも今はそういうことじゃないんだよ。

浩紀　何がだよ。じゃここで何してんだよ。

桜井　浩紀、聞いて。あの子達は、普通じゃない。

浩紀　普通じゃないよそりゃ。

桜井　そうじゃなくて、違うんだよ。

浩紀　何が？

桜井　やばいんだよ。

浩紀　だから何がだよ？

桜井　明らかに、変なんだよ。

浩紀　……お前失礼なこと言うなよ。

桜井　真面目に言ってんの。

浩紀　は？　どうした？

桜井　俺は自分の目で見たものしか信じない。でもこの目で見た。あの子たちは普通じゃない。

浩紀　それは分かったから、はっきり言えよ。

桜井　あの子達は、人間じゃないかもしれない。

浩紀　（苦笑）おいおい。

桜井　見たんだよ本当に。

浩紀　何言ってんのお前。

桜井　信じられないと思うけど、いや、ホントに、あの、聞いてほしい。

浩紀　分かった分かった。

桜井　自分でも馬鹿らしいと思ってるよ。

浩紀　……お前どうしたんだよ？

桜井　俺は、大丈夫。まともだよ心配すんな。浩紀、笑わないで聞いてほしい。話したいことが沢山あるんだ。

部屋の入り口に車田が立っている。それに気付く二人。

■16

街。拡声器を手に声を張上げる丸尾。それを遠目で見る長谷部。
鳴海と真治も丸尾を見ている。

丸尾　この戦争は、おかしいと思うんですよ。一分でいいんです、足を止めて聞いてください。この町で起こっていることなんです。他人事じゃないんです。今まで他人事だった戦争というものが、今起きようとしているんです。この町が戦場になるかもしれないんです。どうして、僕達は戦争しなくちゃいけないんですか？　なぜ、世界は戦争しなきゃいけないんですか？　僕は、その理由を知ってるんです。

飛行機の轟音が丸尾の声をかき消す。
長谷部は鳴海と真治に話す。丸尾は別空間とする。

長谷部　丸尾君は、本当は戦争なんてどうでもよかったんです。ただ、このどうにもならない日常から解放してくれる何かでしかなかった。僕等が思ったのはこれで全部、チャラだ。
丸尾　チェンジ・ザ・ワールドだよ。
長谷部　お祭り騒ぎみたいなもんです。リアルじゃなかった。それが今はどうですか。積極的に反戦運動に参加してる。
丸尾　ヒール・ザ・ワールドだろ。
長谷部　彼に何を吹き込んだんですか？　あなたに会って彼は変わった。
真治　なにも吹き込んでないよ。
長谷部　丸尾君が自分で言ってんすよ、あなたに会って変わったって。彼が今駅前でなに叫んでるか知ってます？　戦争の原因は財産の奪い合いだって。奪った財産を溜め込んで、与えることをしない。財産に縛られているから、人は自由になれないんだって。
丸尾　見えんだよ、新しい世界のビジョンが。フロム・ザ・ニュー・ワールドだ。
長谷部　共産主義みたいなもんすよ。共産主義がどうこう言いたいんじゃなくて、なんで、急にそんなことを言いだしたのかが僕は知りたいんですよ。あなたは丸尾君に何したんですか。
丸尾　（ここから会話に入る）真ちゃんは俺を解放したんだよ。
長谷部　だから何から！
丸尾　そんなのはもう関係無いんだよ、千切れた鎖を大事に持ってる奴はいないだろ？
鳴海　……正直に言って、本当に何かしたの？
長谷部　洗脳ですよ、何か吹きこんだんだ。
真治　吹き込んだんじゃない、奪ったんだよ。
長谷部　……え？
丸尾　真ちゃん、あなたにその力があるなら、俺の友達を救ってほしい。長谷部君を解放して

あげて。

長谷部　やめてください。

丸尾　世界中の人を救ってあげてよ、真ちゃん。

長谷部　やめろって。

丸尾　世の中の馬鹿げたシステムに気が付いたんだ。

長谷部　気持ち悪いよ。格好つけて世界平和とか言う奴を一番嫌ってたのは丸尾君だろ？

丸尾　違うんだよ、そういうのを馬鹿にしてたのはさ、そういうことが俺たちにとってでかすぎたんだよ。でかすぎて俺たちの手に負えなかったんだよ。だから見ないふりをしてた。本当はそういうこと言える奴に引け目感じてたはずなんだよ。

長谷部　だからって俺たちが駅前で反戦叫んでどうなるんだよ。それで何か変わるのかよ、誰か変わるのかよ。なんにも変わらないよ。馬鹿じゃねーの。こんな町でなに叫んだって無駄なんだよ。

丸尾　そんなふうにしか思えないのはね、長谷部君の頭がくだらない常識で雁字搦めになってるからだよ、鎖を千切って貰えよ、真ちゃんに。

長谷部　ここだって戦場になるかもしれないんだよ。死ぬね、確実に死ぬ。今俺たちにできることは、早いとここの息苦しい町を出ることだよ。ああくそ！　ほらみろこの戦闘機はいったいどこへ飛んで行くんだ！

長谷部の声をかき消す飛行機の音。

丸尾　この戦争が止められなかったら、それは俺たちの責任だよ。俺は自分にできることをするよ。さようなら、長谷部君。

丸尾は拡声器を持って走り去る。長谷部はその場に残される。

真治　彼から奪ったのは、確か、所有とか、その辺の概念だったと思う。ごめんね、全部俺のせいなんだよ。

長谷部　……僕が今一番悔しいのは、丸尾君がいつに無く生き生きしてるってことですよ。もう一度彼と話してみます、もしそれでも分かり合えなかったら、僕の鎖も引き千切ってください。

長谷部は丸尾を追う。

■17

街。走り去る長谷部の後ろ姿を見る鳴海と真治がいる。

鳴海　真ちゃんは、何者なの？
真治　うん、実はね、俺、宇宙人なんだ。
鳴海　やっぱり。
真治　えなに？　気付いてた？
鳴海　（笑）気付いてるわけ無いじゃない。
真治　笑うなよホントなんだから。
鳴海　だってお姉ちゃんと言ってたの、まるで宇宙人って。
真治　そんな宇宙人っぽい俺？
鳴海　違うよ、不思議な人を宇宙人って言ったりするの、人間は。
真治　ごめんね、宇宙人で。
鳴海　どんな謝罪よそれは。……ねえ真ちゃん正直に言って。この町で増えてる病気って、真ちゃんが原因なの？
真治　うん。
鳴海　嘘だよね？
真治　いや。
鳴海　嘘でしょ？
真治　嘘じゃない。
鳴海　……じゃあお姉ちゃんをおかしくしたのも真ちゃんなの？
真治　君の身近な人から奪うつもりはなかったけど、あの時はまだ分からなかったんだ。姉という存在の意味が。ごめんね、君の大切な人だと知らなかったんだ。
鳴海　知らなかったじゃないよ。お姉ちゃんなんだよ！　私のお姉ちゃんなんだよ！
真治　ごめん。
鳴海　……治るんだよね？
真治　分からない。
鳴海　自分でやったんでしょ、どうにかしなさいよ！　できるよね？
真治　……考える。
鳴海　どうやったの？　いつそんなことを覚えたの？
真治　それが宇宙人の仕事なんだよ。
鳴海　宇宙人はいいよ。ねえ真治、このこと誰にも言っちゃ駄目だよ。
真治　分かった。
鳴海　絶対だよ。
真治　分かってるよ。
鳴海　……いつから宇宙人なの？

真治　縁日の日。
鳴海　誰と縁日行ってたの？
真治　会社の友達。
鳴海　女？
真治　女。
鳴海　最低。
真治　すいません。
鳴海　今謝ったのは誰？
真治　え？
鳴海　今謝ったのは誰？
真治　俺。
鳴海　真治？
真治　うん。
鳴海　宇宙人？
真治　うん。
鳴海　……どこまで本気？　ていうか本当なの？
真治　俺は嘘は言わない。
鳴海　誓える？
真治　何に？
鳴海　神様。
真治　誓うよ。神様ってよく分からないけど。
鳴海　じゃ真治はどこにいっちゃったの？
真治　ここにいるよ。
鳴海　じゃなくて昔の真治は。
真治　だからここにいる。
鳴海　だから、真治の心は。
真治　その心ってのは無かった、ただ意識があるだけだ。
鳴海　意識？
真治　回路を使わせてもらっているんだよ。ここ(頭)にある情報から立ちあがってくる俺は、真治の可能性の一つだ。俺はただの、働きなんだよ。
鳴海　……なに言ってるの？
真治　要するに、俺は真治なんだ。そして君は俺の妻だ。なにも変わってないんだよ。
鳴海　変わったよ。……私達はね、もうとっくに駄目になってたんだよ。知ってる？
真治　知ってるよ。でも今はうまくいってるだろ？
鳴海　それは宇宙人のおかげ？
真治　そうだよ。真治はこうなることもできたんだ。

鳴海　……じゃあずっと、そのままでいて。
真治　いいよ。でもよかった、全部理解してくれたんだね。じゃあガイドとして聞くけど、今君が言った神様、よく話題に上がるんだ、でもそれに当てはまる概念が見付からない。詳しい人知ってるかな？
鳴海　知らないよ。日本人はね人それぞれなの。
真治　俺が神様について聞くとみんな嫌がるんだよ。
鳴海　当たり前でしょ。
真治　なんで？　大切なもんなんだろ？
鳴海　なんて聞いてるの？
真治　普通に、神様って何だと思いますか？
鳴海　それ宗教の勧誘だから。
真治　え？
鳴海　駄目なの。私達は、大切なものについて話すのが苦手なの。
真治　そっか。じゃあまだ手に入れてない大切なもの結構あるかもな。
鳴海　悪魔について聞いてみたら。神様とは反対のもの。
真治　やっぱり鳴海はいいガイドだ。
鳴海　だからガイドってのはやめて。
真治　いい奥さんだよ。ありがとう。
鳴海　真ちゃん、もう散歩はやめて。勉強は終わり。ばれたら捕まるよ。
真治　仕事なんだよ。
鳴海　やめなさい。
真治　やめない。
鳴海　お願い。
真治　無理だよ。

真治は街へ消える。

■18

街。車田、浩紀、桜井がいる。

桜井　先生、先生！
車田　お、おお。（車田はメモ帳を持っている）
桜井　大丈夫ですか？
車田　おお。
桜井　先生は大丈夫！
車田　大丈夫、いけるいける。だんだん理解してきた。
桜井　さ、そこに座って。ね、先生が、そこに、座るんです。
車田　よし座るぞ。そして、座った。
浩紀　……大丈夫？
桜井　えぇと、宇宙人についてはさっき話した通りです。それで――
浩紀　いやまずその宇宙人てとこに引っかかるだろ。
桜井　よく分かる。確かにその通り。でもこの際便宜上宇宙人という言葉を使う。それに天野君が車田先生をこのようにしたのは事実で、俺はこの目で見たし、先生は直にくらってる。そうですよね先生。車田先生？
車田　今、私車田に出ている症状は、最近この町で急増した病そのものだ。その病に感染する事態に、遭遇したわけだ、車田こと私は。
桜井　そうです。だいぶ良くなりましたね。いいか浩紀、実際その天野という少年との会話中に、先生はこの症状に陥った。彼はそれが宇宙人の力だとはっきりと言ったんだ。
浩紀　どうやって？　目からビームでも出るのか？
桜井　そういうんじゃないんだよ。
浩紀　じゃなんなんだよ。
車田　宇宙人かは知らないけど、私が、あの子に何かされたのは本当です。可能性としては催眠術などの暗示、でもこんな複雑なことが出来るとはちょっと考えにくい。
桜井　もし催眠術だとしても、この町だけで五十人以上の被害が出ているらしいから、警察としても放ってはおけないだろ？
浩紀　まあそうだけど、落ちつけよ。
桜井　これが落ちつけるかっての。あれはもう、魔法だった。まあ天野君の力が何かは置いといても、彼と立花あきらとの関係を説明できるかだ。（浩紀に迫る）
浩紀　分かった分かった。
桜井　どうだった？
浩紀　フルネームは天野真。金輪西高一年。成績は中の上で吹奏楽部。両親と妹の四人暮らし。明るく友達も多く、家族とも仲がいい。今時珍しいくらい普通だ。が、二週間前から言動がおかしく、人が変わったようだと。交友関係をみても、立花あきらと面識がある可

能性は、ほぼ無いな。

桜井　そこなんだよ。二人は出会って二秒後にはお互いを認識してた。もしそれが芝居だったとしても、それを俺に見せてなんの特があるって話だよ。

車田　立花さんはあの事件以来、深い昏睡状態にあって、外部と連絡取ることは不可能でした。誰かと口裏を合わせたり、病院を抜け出す計画を立てるのは不可能だったと思います。

桜井　ええ。明らかにおかしいんだよ。奴等自称宇宙人が繰り広げるこのショーは、誰に向かって発信されてるんだ？　俺たちじゃない。俺たちはたまたまこのショーの登場人物になっちまっただけだ。この物語の結末はどうなる？　浩紀。

浩紀　宇宙人だからね、地球征服か？

桜井　その通り、地球やばいんだよ。

浩紀　……お前、おもしろがってねぇか？

桜井　……。（戯れに笑顔をみせる）

浩紀　ふざけんなよお前。

桜井　（笑）いやいやいや。でももし浩紀、本当に宇宙人だったらどうする？　真面目に。

浩紀　通報するよ、ＮＡＳＡに。

桜井　俺は、本気だ。

浩紀　……すまん、やっぱ降りるわ。

桜井　こんなこと誰も信じないのは、俺だって分かってる。警察に言っても頭がおかしいと思われるだけ。だから、だから浩紀に言ってんだよ。こんなこと相談できるの浩紀しかいないんだよ。分かるだろ。……お前だって被害者なんだよ。明日美さんがあんなことになってんだ。

浩紀　……。

車田　とにかく、この被害の原因は彼らにあること、そして彼等は三人いるということ、そして最後の一人はあなたの義理の弟、加瀬真治さんである可能性が高いということ。ここまで理解してるのはきっとこの僕だけだ。

桜井　訂正すると僕等三人だけだ。そうですよ先生。

車田　そうだ。

浩紀　なんてことだ。

車田　あなたの奥さんもそうだし、僕もそうだ、この症状を治す方法を聞き出さないとどうしようも無い。

桜井　いいですね先生、随分良くなりました。

車田　駄目だよ、メモを見ながらじゃないとうまく話せない。

浩紀　回復できるものですか？　先生。

車田　失ったもの自体は分からないけど、それに近いもので補完できるよ。事態を受け入れればね。

浩紀　先生が失ったものは？

桜井　言葉とは微妙にズレがあるようだけど、行動を規制するような命令、あと自分と他人を区別する人称がごっちゃになってる。

浩紀　アイデンティティ？

桜井　いや自我とは違うみたいだな、その区別に関する辺り、ですかね。

車田　自分という意識はしっかりしてるよ。

桜井　体に染み付いた習慣で、カバーできる部分はあるんだけど、やっぱ意識しちゃうと混乱するみたいね。さっきも横断歩道で俺が先生に、赤になりますよって言った途端、先生はその赤が意味することが分からなくなった。信号の赤と、止まれ、が繋がらないんだよ。

車田　ぼーっとしてると僕は信号無視の常習犯だよ。今のところは丸暗記でどうにかするしかない。

浩紀　ウチのは人間関係に関わることだから、丸暗記じゃどうにもなりません。感情が伴わないんだから。

車田　確かに。

浩紀　でも先生は既に自分の症状に対処できてる。すこし心強いですよ。

車田　いや深刻ですよ。注意しないと他人の言葉が自分の中で聞こえてくる。

桜井　昨日は僕の言葉にいちいちシンクロして、慣れるまで大変でしたよね。先生は今どんな映画を見ても感動できるよ。すべての人に共感できる。

浩紀　ものすごい良い人になっちゃうわけか。

桜井　そうとも限らない。お前のものは俺のもの的に、恐るべきジャイアニズムを発揮する可能性もあるから。

浩紀　それは深刻だな。

車田　ジャイアンにならないように気を付けるよ。

桜井　そうですね、先生。

三人は加瀬家へ向かう。

■19

加瀬家。鳴海がいる。桜井、浩紀、車田が来ている。

浩紀　いや笑い事じゃないんだよ鳴海ちゃん。
鳴海　すいません。え、それで、言いにくいことって？
桜井　ええ。あー今この町で増えている、例の病、その原因と思われる、えー便宜上宇宙人という言葉を使いますが、その宇宙人が、僕等の中に紛れ込んでいるんです。つまり人間の姿をしている。僕はその内の二人に会いました。それはまるで人の皮を被った、悪魔です。どうか気を悪くしないでください、あなたの夫、加瀬真治さんもその一人、宇宙人なんです。いやその可能性があります。
浩紀　……ごめんね、馬鹿げた話で。
鳴海　それは、本当なんですか？
浩紀　いや分かんないよ。
桜井　思い当たる点、ありますよね？
車田　疑いたくはないけど、あなたが言ったようにご主人が回復してるなら、理由を知りたいんです。どうか、協力してください。
鳴海　……一応本人からは、聞いてますけど。
浩紀　なにを。
鳴海　宇宙人？
浩紀　……え？
桜井　自分で言ったんですか？
鳴海　はい。
浩紀　あそうなの。
鳴海　宇宙人みたいだけど、真治ですよ。
桜井　違います、もうあなたのご主人じゃないんですよ。
鳴海　え、ほんとに宇宙人ってことですか？
浩紀　いや――
桜井　そうです。
鳴海　宇宙人だとしても、あれは、加瀬真治です。
桜井　だから加瀬真治という人格が、乗っ取られているんです。
鳴海　でもちゃんと記憶もあるし。
桜井　いや、はい。分かりました。……まぁでもほぼ間違いないでしょ、加瀬真治さんが三人目です。
鳴海　待ってください、それはまだ分かんないですよね。ね、浩紀さん。
浩紀　……本人に聞いてみよう。
車田　ご主人は毎日散歩すると言いましたよね。そこでの学習について、何か聞いてますか？

鳴海　いえ詳しくは。本当に真治が原因なんですか？　証拠はあるんですか？
車田　残念ですが、可能性は高いです。
桜井　加瀬さん、真治さんの性格が変わってから、彼の近くに誰かが現れませんでしたか？　彼と行動を共にするような。
鳴海　いや、いないと思いますけど。
桜井　本当ですか？　散歩に出た時誰かに会っているとか。彼ら宇宙人は、どうやらガイドと呼ばれる保護者を作るようなんですよ。心当たりありますか？
鳴海　……。
桜井　いるはずなんです。ガイドに話を聞くのが一番早い。人間ですからね。どういうつもりでやってるかは分かりませんけど、会って現状を共有しないと。……どうですか？
鳴海　……。
桜井　お願いします。
鳴海　（悩んだ末）……私。
桜井　はい。
鳴海　私ガイドです。
桜井　マジっすか。
浩紀　なんでもっと早く言わなかったの！
鳴海　だって何のことかよく分かんなかったから。
桜井　ここまで知っててなんであなたは！
鳴海　最近知ったの！　でもこんなこと誰に言えばいいのよ！　それにウチの真治は普通に、人間だし、全然、悪魔みたいじゃないもん！
車田　みたいじゃないもん！

皆、突然声を上げた車田を見る。

桜井　落ち着きましょう。先生シンクロしてるから。
車田　失礼。
桜井　いいんです。……ま、それならそれで、いいですよ。手間が省けた。僕もガイドなんです。僕等ぐらいですよ宇宙人のガイドなんて。（浩紀と車田に）どうですか？　面識の無い三人がここまで同じこと言います？
浩紀　……真治君は？
鳴海　今は、散歩に。
桜井　まずいな、天野君達と鉢合わせなきゃいいけど。これからは真治さんを外に出しちゃ駄目です。
鳴海　出来ませんよ、ペットじゃないんだから。
車田　じゃあ彼は今も、外で出会う人から概念を、学習している。

鳴海　そうなんじゃないですか。
桜井　加瀬さん、開き直っちゃ駄目です。確かにご主人のように見える。でも違う。彼らがしてることは犯罪なんです、共犯者になっちゃ駄目です。
鳴海　じゃあどうしたらいいのよ！
桜井　それを考えるんです、僕らが。とにかく、話がしたい。彼らの本心を知りたい。
鳴海　真治は捕まっちゃうの？
浩紀　それはまだ何とも言えないよ。
鳴海　……やめさせます。私がやめさせますので、時間をください。

真治が帰ってくる。

真治　こんにちは。ウチにお客さんとは珍しいと思ったら、みんな見た顔だ。どうしたんですかおそろいで。
桜井　……僕のことを覚えているんですか？
真治　覚えてますよ。僕を交番に連れていってくれた。車は確かフィット、あれはレンタカーだったね。あの時はありがとう。あぁ浩紀さん、どうも。先生、わざわざ来てくださったんですか。僕はもう大丈夫ですよ。すいません再検査に行かなくて。素人判断は良くないと思ったんですけどね、すいません。鳴海、お茶ぐらい出したら？

真治は流暢に喋り、振る舞いも自然。その変化に桜井と車田は目を見張る。

車田　驚いたな。まるで別人だ。
真治　先生のおかげですよ。
車田　本当に、学習したんだね。
真治　んん？
桜井　宇宙人ですよね？
真治　なんの冗談ですか？
桜井　隠さなくてもいいです。概念を奪う、宇宙人、ですよね？
真治　……言ったの？
鳴海　言ってないよ。
真治　ひょっとして、他の二人を知ってるのかな？
桜井　他の二人って？
真治　……君はひょっとして、ガイドか？
鳴海　そうみたい。
桜井　ちょっと！
真治　そうなんだ。どこにいるか教えてくれないかな。

桜井　駄目です。
真治　……まいいよ。向こうも探してる頃だろうし。
浩紀　君は誰だ？
真治　真治ですよ。
桜井　宇宙人なんでしょ。
真治　だとしたらどうなんです？　宇宙人なんて言葉、誰もリアリティを持てないでしょ。僕等にとっちゃ都合のいい言葉だよ。君等くらいだ真面目にそんなこと言うのは。珍しいね。いや褒めるべきかな？
桜井　宇宙人らしくなってきたじゃないか。
真治　（笑）そうかな。
桜井　でもよかった、他の二人よりは話が出来そうだ、あなたは。
浩紀　真治君、本当に君がやったのか？　明日美だよ。
真治　すいません。
浩紀　何をしたんだ？
真治　概念を、奪いました。
浩紀　が、概念てお前……自分が、自分が何したか分かってんのか！
真治　分かってます。理解しましたから。でも奪う前は分からなかったんですよ。

浩紀は思わず真治の襟首をつかむ。衝動を押さえ、突き放す。

浩紀　鳴海ちゃん、こいつはもう真治じゃないよ。
車田　どうしたら元に戻るんですか？
真治　分かりません。学習した相手が失うのは、予定外だったんで。
浩紀　冗談だよな、おい、ふざけんなよ。
真治　本当にすまないと思ってます。
浩紀　おい！
鳴海　治るよね？　どうにかするって言ったよね？　絶対どうにかするんで。できるよね。だから、少し時間をください。
真治　時間は、そんなにないんだ。
鳴海　え？
真治　成果は充分上がってる、そろそろ終わりにしないと。それにこのまま続けるのも迷惑だろ？
鳴海　終わりってどういうこと？
真治　そうだな、分かりやすく言うと、自分の世界に戻るんだ。
浩紀　おいおいお前、何言ってんだ？
鳴海　ちょっと待ってよ。あなたは真治でしょ？　真治はどうなっちゃうの。

真治　終わりだよ。
鳴海　待って待って、元の真治に戻るとかじゃないの？
真治　言ったよね、今ここで活動してるのは俺なんだよ、心と体は別物じゃないんだ。
鳴海　分かんないよ。
真治　金魚で確認した。活動が止まるんだ。つまり……死ぬんだよ。

鳴海はショックを受ける。
失った概念は戻らないという事実が、浩紀と車田を苦しめる。
桜井は自分に何ができるか考える。

■20

海岸。丸尾と長谷部。

丸尾　晴れた日は二階の窓からあっちの大陸が見えるんだ、シルエットで。久しぶりに世界地図を見たよ。これっぽっちの距離だ。

長谷部　ニュース見た？　そのこれっぽっちの真ん中に、潜水艦が潜んでるらしいよ。敵さんの。

丸尾　それは政府の発表？

長谷部　さあ。それよりもっと丸尾君らしいコメントないの。潜水艦？　マジかよ格好いいぜ。人間魚雷でバンザイマンセーだ。

丸尾　エニグマみたいな特別の暗号システムがあってさ、ゲイの士官がそいつでピロートーク、でチンポコメルトダウンで深海魚が人面魚だ。

長谷部　（笑）いいね。

丸尾　長谷部君、戦争の種ってやつは平和って大地で良く育つんだ、当たり前だよな。平和ってのは戦争の準備なんだよ。だから国は一生懸命軍隊を大きくするし、俺たちは毎晩戦争の映画を観るんだ。

長谷部　じゃ楽しもうよ、映画の世界に入ったんだ。

丸尾　だから楽しんでるんだよ。長谷部君は俺を否定するけど、楽しみ方としては君の方が間違ってんだぜ。

長谷部　なんでだよ。平和とかデモとか、キャラじゃないでしょ俺ら。

丸尾　分かってないな。

長谷部　そっちだろ。

丸尾　そりゃ平和な国で世界平和叫ぶのはダサイと思うよ。でも今戦争なんだよこの国。

長谷部　やってるのは海の向こうでしょ。

丸尾　今はね。でもこの国が戦争してるのは事実だろ。戦争してる国で戦争叫ぶのって同じようにダサくね？　て理屈になんね？

長谷部　屁理屈だよ。

丸尾　でもリアルはこっち側だよ、格好いいのもこっち側だ。どう考えても俺たちが戦争する理由なんてねえんだよ。間違ってることには間違ってるって言わねぇと、後でおかしなことになるんだよ。キャラとか関係ねぇよ、恥ずかしがんな。

長谷部　説得されませんからね。

丸尾　こっち来いよ。一回マジになってみようぜ。

長谷部　大体ね、丸尾君がそんなこと言うのは真ちゃんのおかげなんだよ。

丸尾　そうだよ、君だって会っただろ。

長谷部　でも鎖は着いたままだフェアじゃないんだよ。

丸尾　ちぎって貰えよ。

長谷部　丸尾君はね、所有財産がどうとか駅前で叫んでるけど、ホントはそんなこと分かってな

いからね。
丸尾　なんだよそれ。
長谷部　だって所有って概念自体失ってるんだから。
丸尾　え？
長谷部　それだけで共産主義みたくなっちゃって、単純すぎるよ。
丸尾　言ってる意味が分かんないよ。
長谷部　だから一生懸命否定してる所有財産ってものを、丸尾君は理解していないんだよ！
丸尾　だったらそれでいいよ。
長谷部　理解できないものに対して何が言えるんだよ。
丸尾　もしそうなら、それはきっと社会に必要ないものだったんだ。だってそれを失った俺は、こうやって世界を否定しているんだから。
長谷部　でもそれを理解したうえでなけりゃ、本質的なことは分からないんだよ。
丸尾　長谷部君、さっきから何を言ってるんだ？

長谷部は、所有について丸尾と議論が成立しないことを実感し、絶望する。

長谷部　……何も言ってませんよ。
丸尾　俺が羨ましいんだろ？
長谷部　（笑）そうかもしれませんね。
丸尾　鎖を引き千切って貰えよ、真ちゃんに。
長谷部　いや、このままで充分ついていけます。
丸尾　ほんとか？
長谷部　丸尾君が失ったものは、僕がなんとかします。
丸尾　頼むよ。
長谷部　じゃ、行きますか。
丸尾　俺たちにできることをやろう。
長谷部　はい。

飛行機の轟音。丸尾と長谷部は歩き出す。

■21

街角。真治を連れた鳴海、浩紀、桜井は、天野とあきらに遭遇する。

天野　探したよ。仕事は順調？
真治　ええ。お疲れさまです。
天野　お疲れさまです。
あきら　収穫は？
真治　たっぷりありますよ。
あきら　えー教えて教えて。
天野　全然駄目なんだよ。
あきら　しょうがないでしょ。
真治　そちらはどうですか？
天野　俺とお前合わせたらコンプリートできんじゃん。最近はダブリばっか。
真治　俺もですよ。
あきら　報告会しようよ、行こう。
鳴海　ちょっと待って。
天野　なに？
鳴海　行っちゃ駄目よ真ちゃん。
あきら　なにその女。
真治　俺のガイドです。
鳴海　ガイドじゃないでしょ！
真治　俺の、つ、妻です。
鳴海　自信持って言ってよ。
天野　じゃ一緒に来たら、ガイドなんだし。桜井さん行くよ、車出して。
浩紀　駄目だよ。君等には聞きたいことが山ほどあるんだ。
天野　あれ？　お前だけ関係ないな。どっか行けよ警察屋。
浩紀　あんまりなめないでくれよ。その気になったら身柄を拘束できるんだぞこっちは。
天野　何の容疑で？
浩紀　なんだっていいよ。
天野　そんなことできないんだろ？
浩紀　できるよ。
天野　ウソ言え下っ端のくせに。
浩紀　お前いい加減にしろよ。とにかく話を聞きたい、一緒に来てもらうけどいいよな。
天野　やだよ。だってそれ任意同行ってやつでしょ？　俺たちは何も盗んでない。概念を奪うことを禁じる法律はあるの？　あったとしても証拠は？

浩紀　どうせ薬か何かなんだろ。宇宙人とか言ってふざけんなよ。
天野　馬鹿だな、証拠なんて出るわけないのに。
浩紀　出なくてもこの町の住人が証拠だ。
天野　証拠になるかなそれが。そもそも証拠ってなんだ？　ねぇ証拠って何？
浩紀　証拠？
桜井　考えるな。質問に答えちゃ駄目だ。
天野　……邪魔しないでよ桜井さん。
桜井　ごめん。
天野　どうしたの？
桜井　……天野君。ガイド、辞めていいかな？
天野　なんで？
桜井　最初はただ、面白がってたんだ君のこと。ただのおかしな子だと思ってた。でも今は違う、君達の存在に、言葉を与えられないんだよ。
天野　宇宙人でいいじゃない。
桜井　宇宙人なんて、現実にいちゃいけないんだよ。
天野　いるだろここに。
桜井　ああ、だからもう宇宙人をネタにはできない。笑えないんだよ。なんなんだよ君達は？
天野　どうしたの、今更？
桜井　……浩紀、やっぱり今ここで、彼らを拘束した方がいいのかもしれない。
天野　無理だよ、宇宙人を捕まえる法律はないからね。
桜井　侵略するって言われて、はいそうですかってわけにはいかないんだよ。
天野　だって誰も信じてないよ、俺達が侵略するってこと。
桜井　侵略するんだろ？　そのための調査なんだよな。な、浩紀、無理矢理でも拘束すべきなんだ。取り返しのつかないことになる前に。
浩紀　桜井、とりあえず宇宙人とかは置いとけ。
桜井　最悪の事態を想定してくれよ。お願いだから。間違ったら恥ずかしいって理由で、取り返しのつかないことになってもいいのか？
浩紀　分かったから、落ち着けよ。
桜井　分かってないんだよ！　ぼーっとしてる内に始まったこの戦争と同じように、またぼーっとしてる内に、侵略されんぞ。俺達の問題なんだよ！　宇宙人とか馬鹿馬鹿しいよ、でもな、誰かが本気にならなきゃ真実は分かんねぇんだよ。……分かった分かった、いいよ、一回マジになってみよう。おい宇宙人！　お前等の目的はなんだ！　地球は侵略させない。

天野はわざと芝居がかった調子で応える。

天野　よく見破ったな。我々の目的は地球の侵略。お前等の力は、我々の足元にも及ばない。戦いになったら恐らく三分も持たないだろう。さようなら人類。ウルトラマンは渋滞で遅れるそうだ。

あきら　（笑）あははは……。

桜井　天野君、いったい何が本当なんだ？

天野　マジになっていいんだよ。恥ずかしがんな。平和ボケが過ぎるよ。

桜井は天野に襲い掛かり、首を絞める。

浩紀は慌てて桜井を止めに入り、力ずくで天野から引き離す。

浩紀　おい！　ちょお前、何やってんだよ！

桜井　事件が起きてからじゃ遅いんだよ！　もうやなんだよ！

天野は苦しそうに咳をする。

浩紀　お前今、この子を殺そうとしたんだぞ。

桜井　人じゃない。

鳴海は桜井の態度に怯え、真治の手を引いてその場から逃げ出す。

桜井　おいちょっと待て！

浩紀は桜井をつかんで止める。鳴海と真治は逃げる。天野は立ち上がる。

天野　もう撤収しようよ。なんか面倒くさくなってきたし。

あきら　でも私、帰る前にちょっとだけ仕事してきていいかな。

天野　この町もう虫食いだらけだけどね。

あきら　手ぶらというわけにはいかないよ、さすがに。

天野　勝手にすれば。

天野は桜井を見る。

天野　友達だと思ったのに。

あきらと天野は別々に街へ消える。

浩紀は尻を付いたままの桜井に手をかす。二人は真治達を追う。

■22

海岸。鳴海と真治。

真治　ごめんな、侵略するって言わなくて。
鳴海　そういう告白はもっと偉い人にしてよ。……どんな感じなの？
真治　何が？
鳴海　侵略って。
真治　よく分かんないよ。
鳴海　緊張感ないよね。
真治　だから、俺はもうすぐ帰る。今まで本当にありがとう。
鳴海　やめてよ。
真治　実際そうなると思う。……でも俺は、君だけが心残りだ、心配なんだよ。
鳴海　じゃあ真ちゃんもここに残ったら。
真治　それは無理だね。
鳴海　じゃあ私が真ちゃんに付いて行こうか？
真治　もっと無理だよ。
鳴海　じゃあなに？　これでさよなら？
真治　いや、なんか、できることないかなと。
鳴海　侵略する気ある？
真治　うん、まあ。
鳴海　なにそれ。……真治って、いったいなんだったの？
真治　一人の人間だよ。
鳴海　宇宙人でしょ。
真治　でも俺は、真治のため込んだ情報の、その上にいるんだ。少しずつ、記憶と馴染んできたんだよ。最初はただの情報だったものが、自分の経験として楽しめたんだ。だから思い出話を、本当に笑うことができたんだよ。
鳴海　私は性格が変わった真治を、今まで通り真治だと思ったし、正直前の真治より好きになったくらい。
真治　そうだよ。そうなんだよ。俺も好きなんだ。いや、それに近い感情がある。

真治はその感情に言葉を与えられず、もどかしく思う。

鳴海　そうだ。真ちゃん。愛っていう概念は奪った？
真治　あぁぁ、それね。かなり気にはなってたんだけど、それもみんな話そうとしないんだよ。なんでかな？

鳴海　（笑う）
真治　なに？
鳴海　恥ずかしいからでしょ。
真治　なんで？
鳴海　そうなの。誰も見ていないところでしか、その概念については話さないんだよ。
真治　そうか。
鳴海　いや愛の概念について語り合うカップルも無いな、（笑）無い無い。……でも真ちゃんはきっと持ってる、その感情を。ほんとは言葉なんて関係ないんだよ。でも真ちゃんは翻訳できないの、その概念を持たないから。
真治　……そうか。それはやっぱり大切なものなのかな？
鳴海　そうだね、あの二人も絶対に手に入れてないと思う。
真治　ほんとに？　じゃあ帰る前にそれ手に入れないと。ちょっと行って来る。
鳴海　待って。
真治　え？
鳴海　駄目だよ。道で会う人からは絶対に無理。それを本当にイメージできるのは、私しかいないの。……私から、愛という概念を奪って。
真治　……駄目だよ。ガイドからは奪わない。
鳴海　今の真治にそれをイメージできるのは私だけなの。
真治　なんで？
鳴海　奪ったらきっと分かるよ。
真治　……駄目だよ。
鳴海　いいの。
真治　……。
鳴海　分かって欲しいの。帰る前にそれをわかって欲しいの。
真治　なんでだよ。
鳴海　いいからやってよ。だって死ぬんでしょ真ちゃん。帰るって死ぬってことなんでしょ？いいんだよ一石二鳥なの、自分の気持ちと、私の気持ちがわかるから。で私は真治がいなくなることを悲しまなくてすむから、だってそうでしょ、愛がなにか分からなくなるんだから。それが一番いいじゃない。
真治　なに言ってるか分かんないよ。
鳴海　いいからやって。もう充分スタンバってるから。頭の中それでいっぱいだから。会話も質問も要らない。言葉なんて関係ないんだから。
真治　駄目だよ。
鳴海　お願い。
真治　……分かった。いいんだね？
鳴海　いいよ。それ持ってとっとと帰って。

真治　……分かった。

鳴海の体が強張る。涙が流れる。

真治　おい、どうした？　鳴海？　まだ奪ってないよ。

鳴海　はは、はは、怖いね、なんか怖いよこれ。ちょっともう、早くしてよ。

真治　……ほんとにいいんだね？

鳴海　早く。早く！

真治　ありがとう。それを、貰うよ。

鳴海の中から愛という概念が失われる。

同時に真治は自分の感情が愛であることを理解する。

鳴海は恐怖で混乱する。鳴海を抱きかかえる真治。

真治　終わったよ！　もう終わったよ！

鳴海　……え？

真治　終わった。終わったよ、ありがとう。

鳴海　あ。（涙を拭く）……あれ？　はは……。なんだっけ、私、何を失ったの？

真治　愛だよ。

鳴海　知ってるよそんなの。

真治　君は、その言葉を知ってるだけだ。今なら分かるよ。君の中の、一番大切なものを奪ってしまった。

鳴海　……そうなんだ。でも大丈夫。私、意外と平気かも。はは……

鳴海は自分の失ったものに気付けない。

真治は自分が理解した愛を、鳴海と共有できないことに絶望する。

鳴海　ちょっと。どうしたの真治？　（笑）残されるのは私なんだからね。

真治は慟哭する。

鳴海は真治の悲しみを理解することができない。

桜井と浩紀が現れ、鳴海と真治を見付ける。そこに丸尾と長谷部が駆けつける。

丸尾　真ちゃん、俺いいこと思いついたよ。テレビやラジオ、ネットとか使って概念奪えないかな。国家、財産、人種、宗教？　よく分かんねぇけどさ、そういうの奪ったら、戦争

止めんじゃねぇかな。……どう思う？　真ちゃん。

真治は反応しない。

桜井　それいいかもしれませんね。だって今は戦争どころじゃないから。もっと大きなのが、そこまで来てるかもしれないんだから。

丸尾　なんすかそれ？

浩紀　世界が一丸とならなきゃ、歯が立ちそうにない奴。

丸尾　おもしろそうじゃないすか。

桜井　やってみましょうよ。メディアはなんとかします。

鳴海　無理だよ。だって真ちゃんは、宇宙人なんだから。侵略する側なんだから。

真治は立ち上がる。皆真治を見る。

真治　……それが、今はもう、よく分からないんだ。

真治は笑顔を見せる。

暗転。

――了